投

360
60

360

四壽一先生題辭

遠間幸一郎著

東洋及人物

361-60

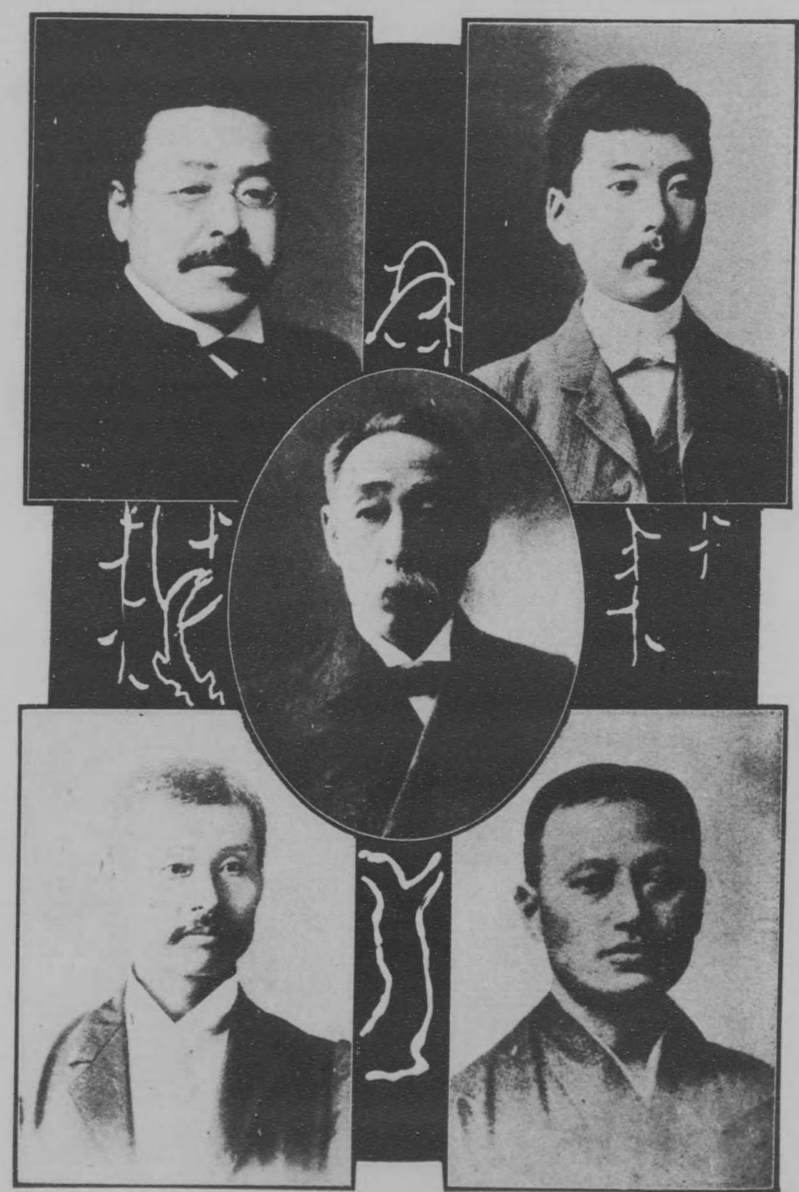
法學博士 添田壽一先生題辭
妖星 遠間平一郎著

事業及人物

大正
4. 4. 5
內交

正其誼不謀其利
明其道不計其功

法學博士 添田壽一先生題辭



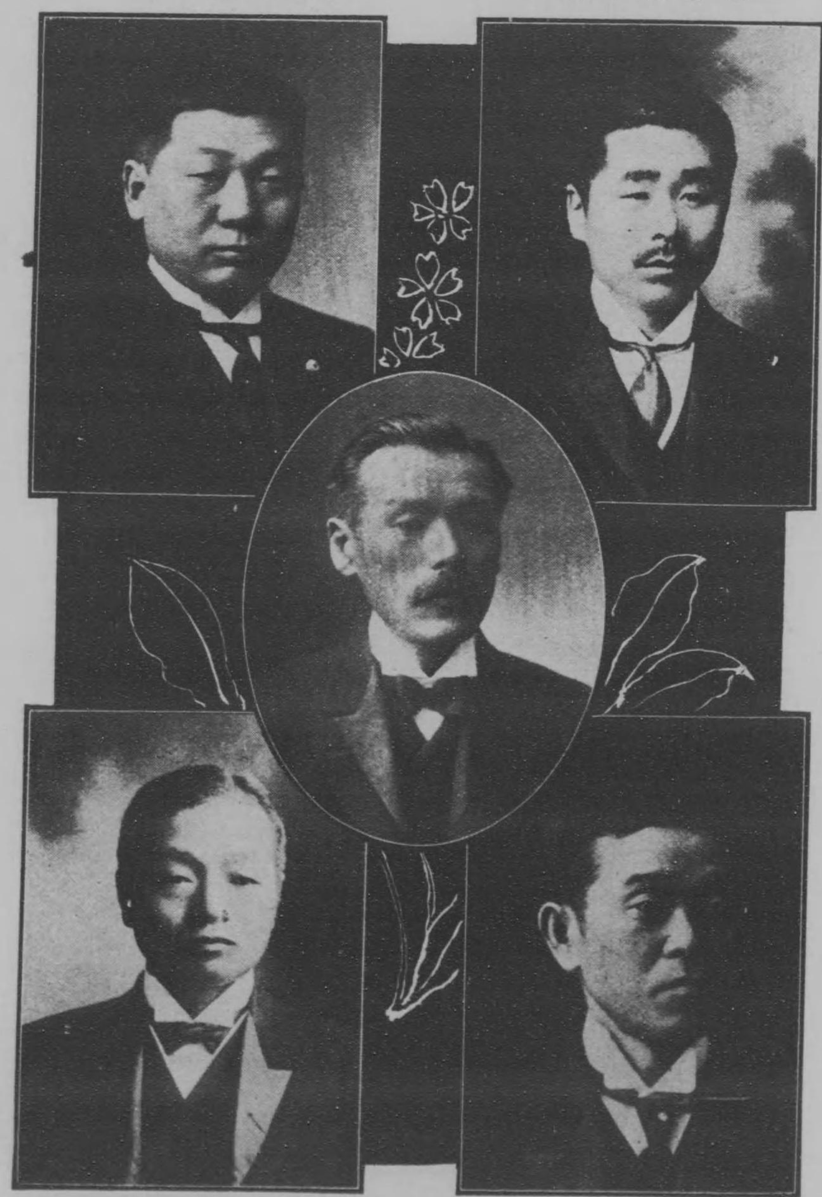
早川千吉郎氏　　池田成彬氏

三井高保氏

坂田實氏　　米山梅吉氏

田邊熊一氏

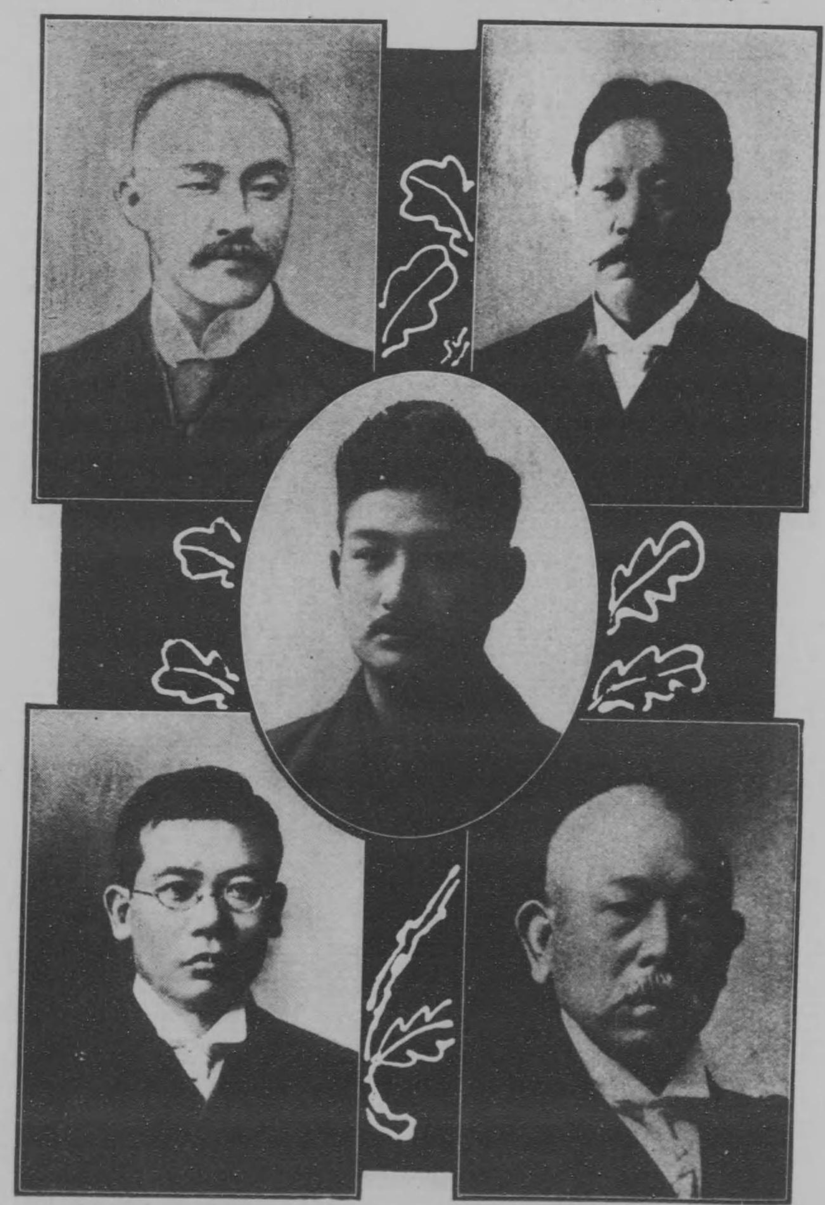
高倉藤平氏



日比谷平左衛門氏

田村正寛氏

根津嘉一郎氏



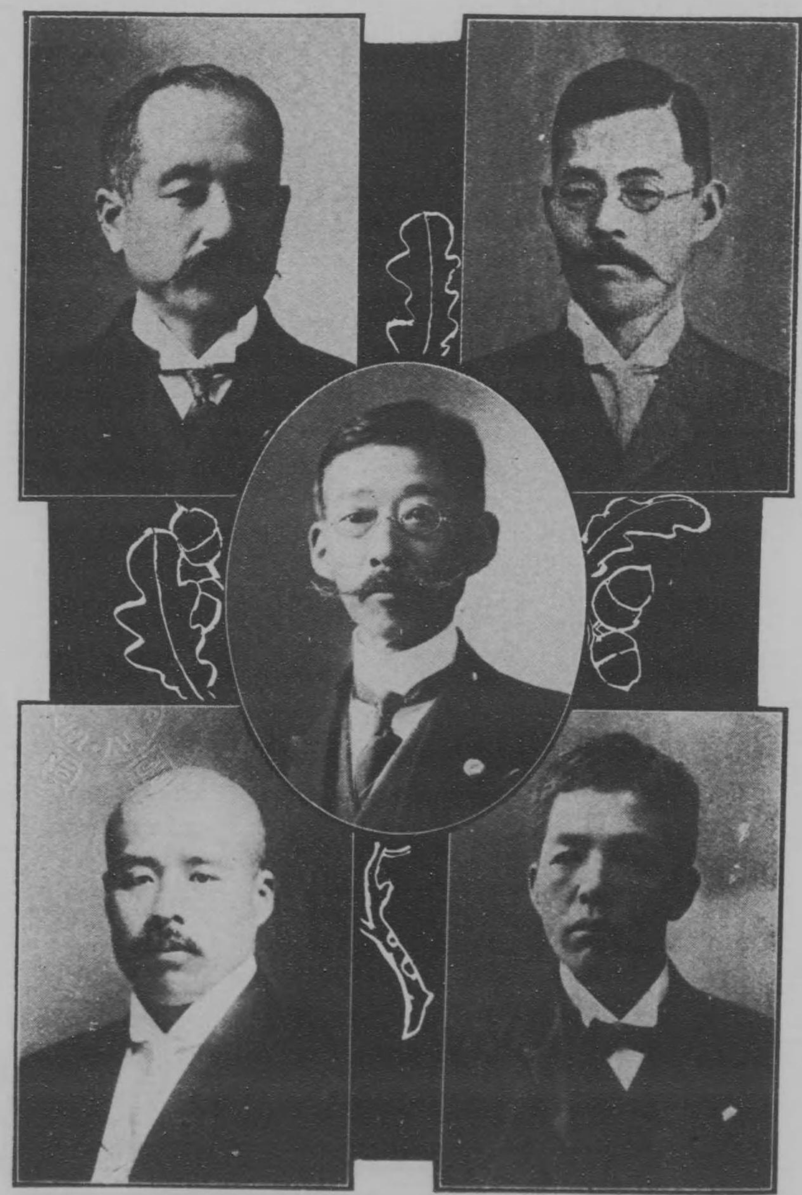
柳生一義氏　　小野金六氏

古河虎之助氏

南波禮吉氏　　福原有信氏

安場末喜氏

池田寅次郎氏

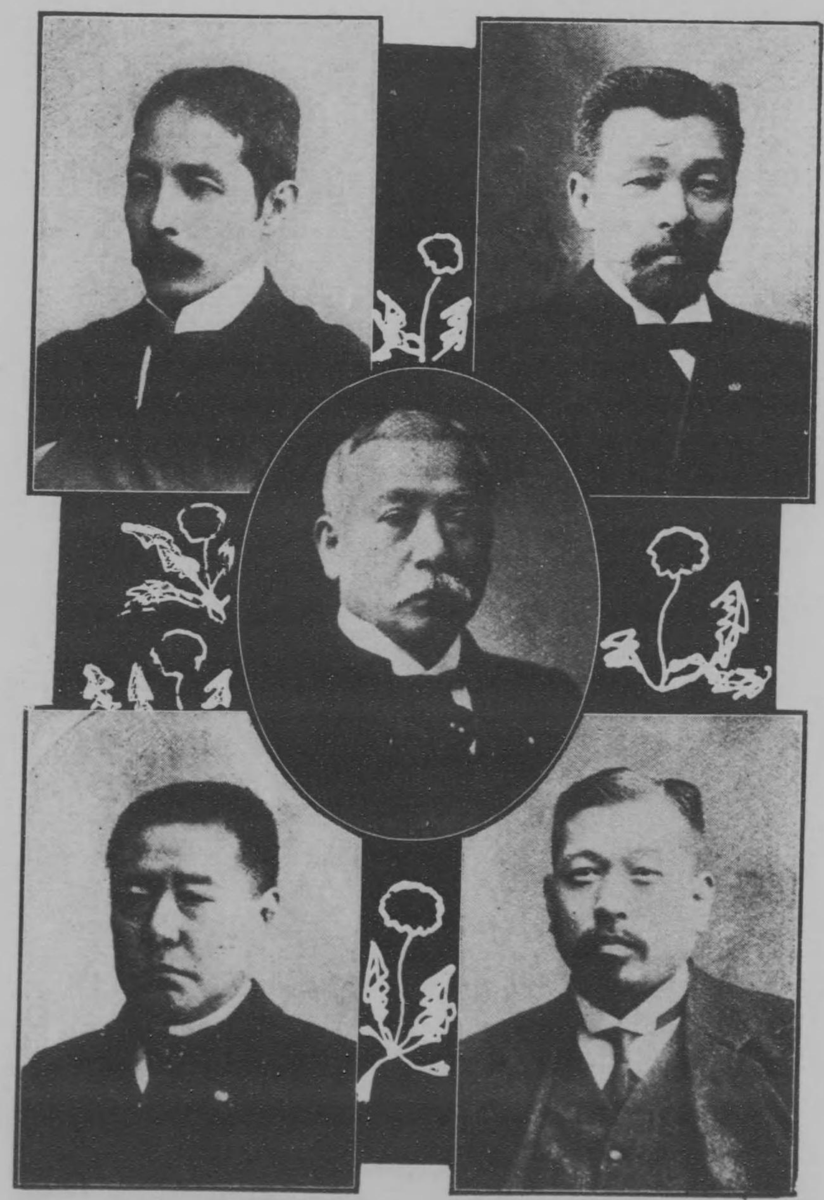


阿山葉鎗三郎氏

矢野恒太氏

小池國三氏

林民雄氏　　加藤正義氏

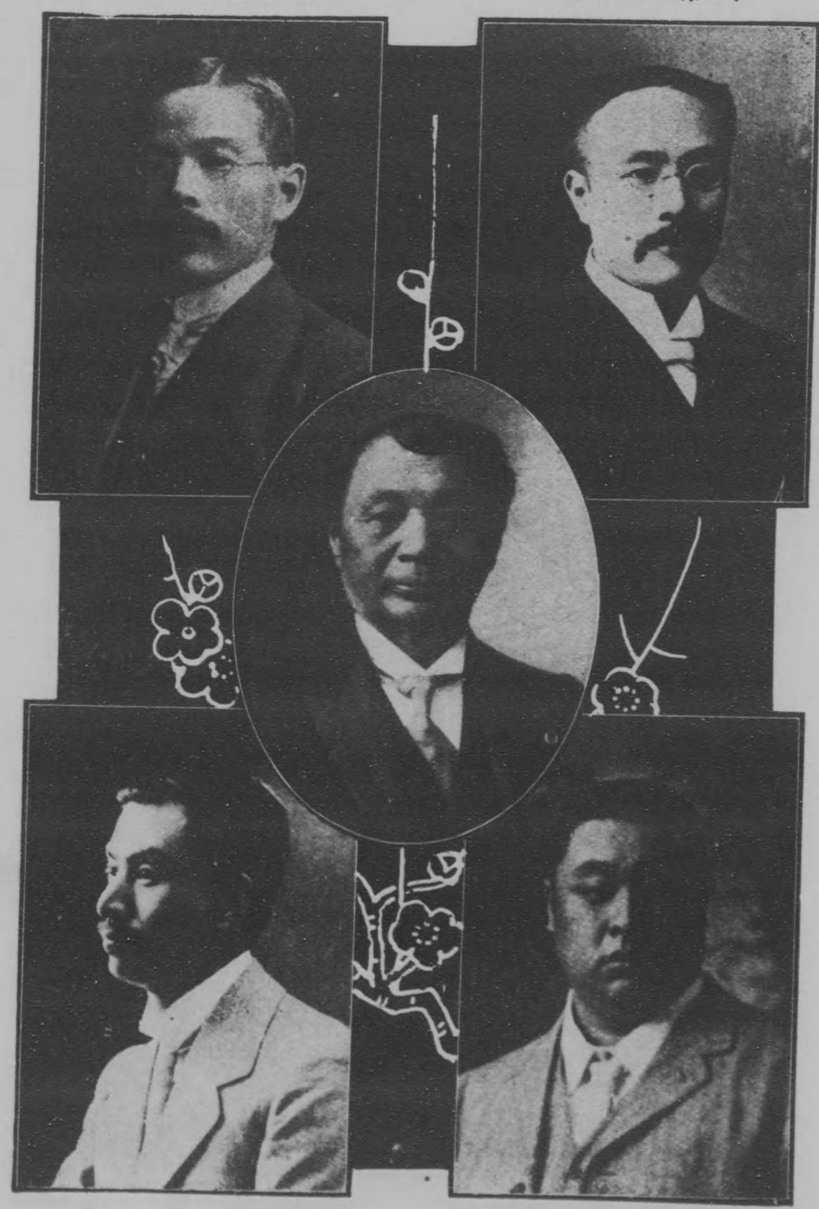


近藤廉平氏

阿部浩氏　　牧野元治郎氏

山成喬六氏

武藤山治氏

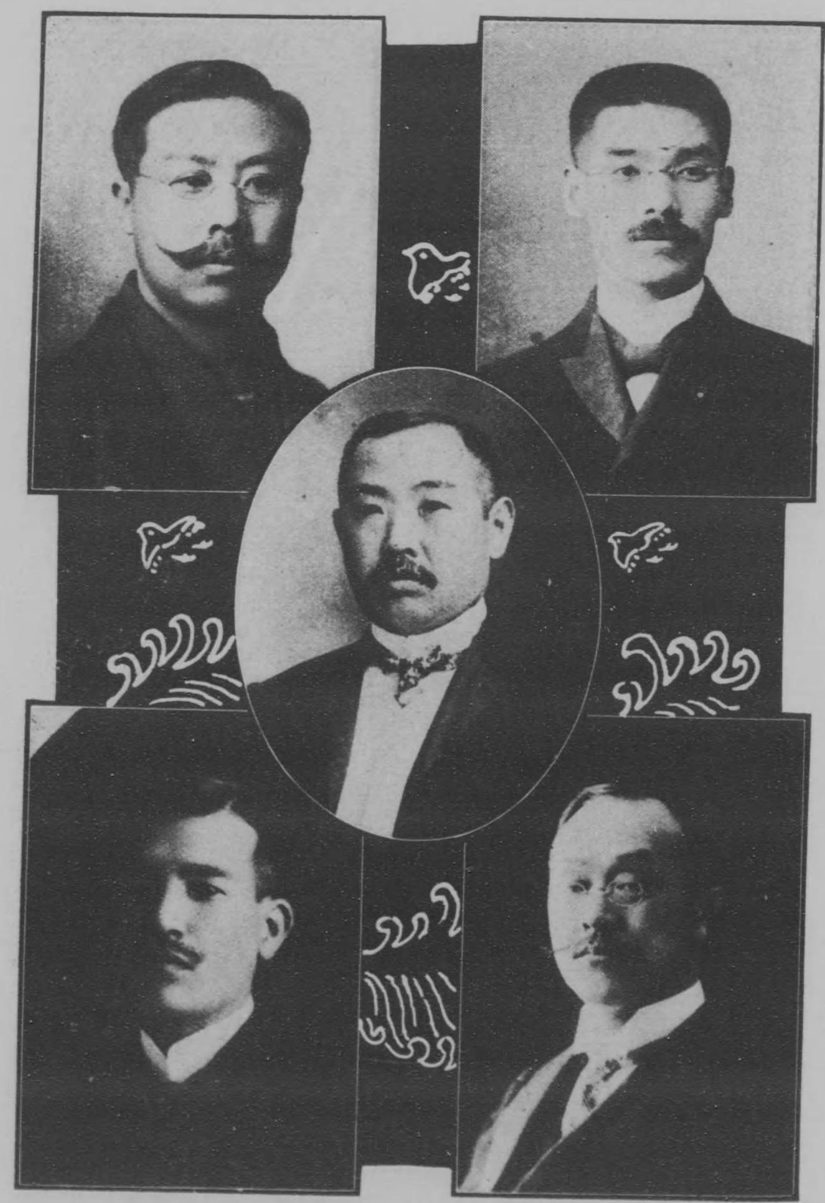


大倉喜八郎氏

神田鐳藏氏

松谷元三郎氏

栗津清亮氏　　下郷傳平氏



村井吉兵衛氏

辻川敏三氏　　藤岡市助氏

末延道成氏

菊地長四郎氏

鈴木萬次郎氏

增田次郎氏

川北德三郎氏

望月右内氏

神戸學一氏

佐竹作太郎氏

今井安太郎氏

越山太刀三郎氏

正田貞一郎氏

今井喜八氏

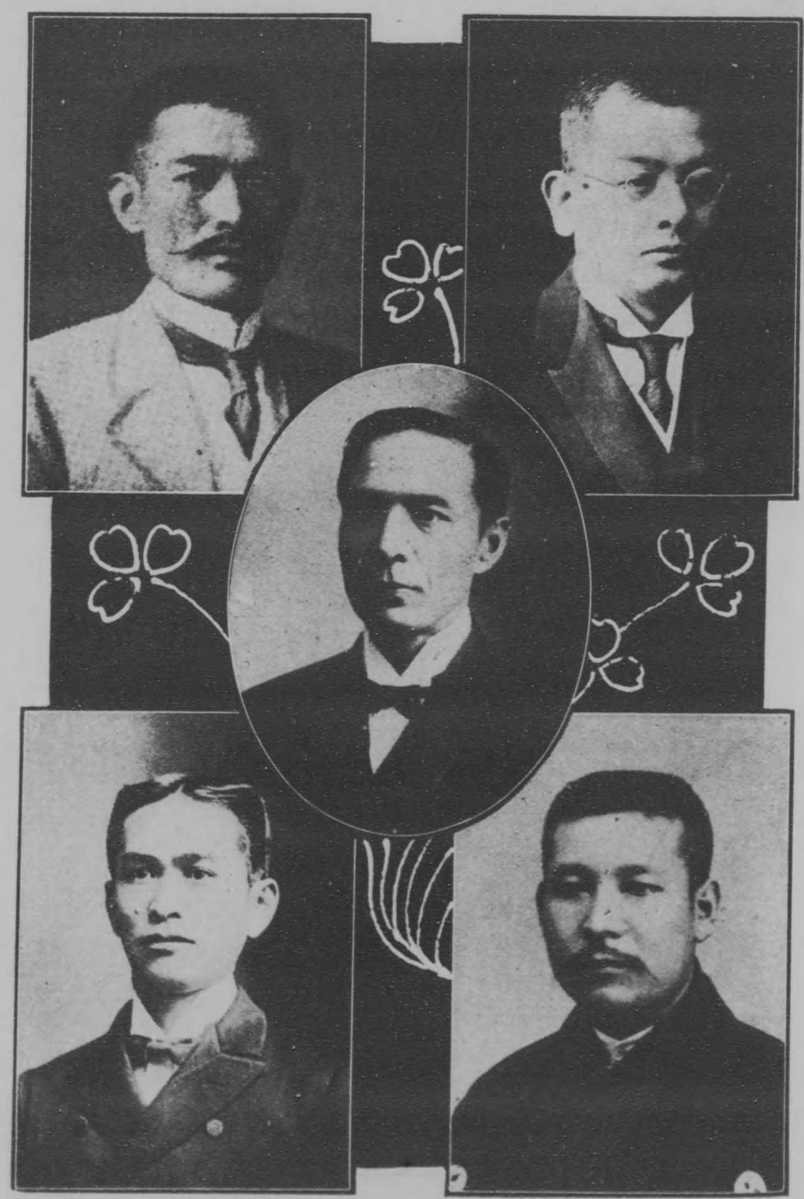
楠秀太郎氏

前川太兵衛氏

小布施新三郎氏

高野今彦氏

小原元美氏



荒井泰治氏

内藤彦一氏

小林寅吉氏

中山佐市氏　　村井貞之助氏

中島久萬吉氏

田野豐氏　　藤山雷太氏

大石保氏

村上太三郎氏

松方巖氏

荻野万之助氏

阿部吾市氏

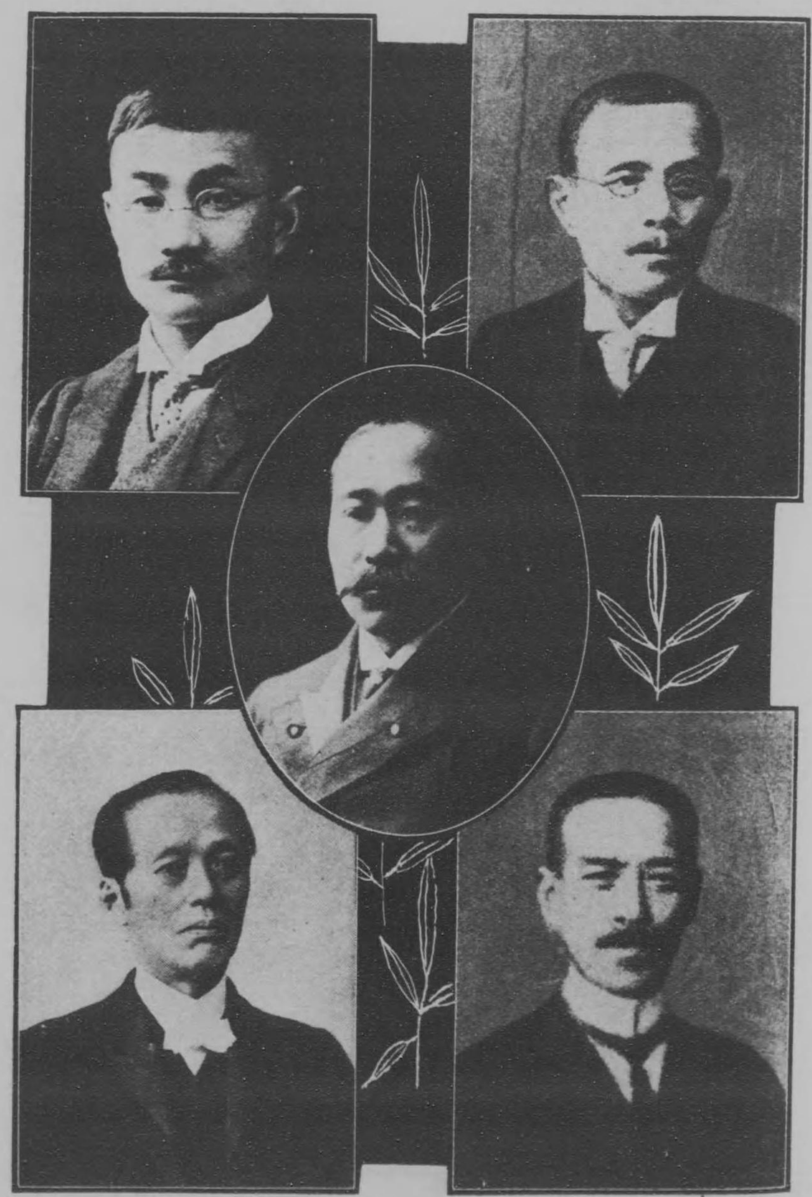
肥田景之氏　　岡烈氏

山本久顯氏

志立鐵次郎氏　　伊藤政重氏

藤田謙一氏

内田直三氏



片岡直温氏

徳田孝平氏

綾井忠彦氏

序

畏友妖星君、最近著はす所の『事業及人物』の一篇を把つて、新たに梓に上さんとす。

凡そ文物と事業、明治大正の昭代に至つて、千古の盛觀を示せり。之れを瀛西文華の爛熟せるに比すれば、未だ幾分の精彩を缺くと雖も、過去僅かに五十年にして、舊日本を横絶し、文化燦然として煥發したること、正に萬古を空うせり。實に明治維新は、新舊の日本を區劃したる文野の分水嶺にして、大正は、過渡文明を濾過して得たる一箇のエツセンスたらずんば非ず。

最近五十年間に於いて、財界の事業は、勃然として發展したりき。事業は、固と人生の外部形式の發露にして、内部生命の趨勢は、

其の經營の人物に就いて窺ふを要す。即ち文明の解剖は、事業と人物とを載せて俎上に置かずんばある可からず。若し夫れ近代文明の價値を知らんとするに、單に事業の變遷起伏をのみ察するに己み、敢て人物を重視せずんば、其の見解、多く皮相の範疇を出でざらむ。

妖星君、筆を載せて財界に遊ぶこと、殆んど十年。么を窮め、微を穿つ。曩に君は『財界一百人』を著はして、明治財界の名流を評隲すること、縱横無礙、內部生命の搏脈を察して、以つて外部形式の趨向を卜し、千鈞の鐵案、當に千古を空うするの概ありき、輙ち其の月旦、把阮肆習の徒に倣はず。嶄然として財界批判の一權威たりき。

妖星君の文を行るや、藻葩婉約、章句贍逸、頗る妙を極む。君が炬の如き眼光、一たび財界の闕陷に觸れんか、抓羅剔抉、到らざる莫し、或は懼る、君が辛辣の筆、適々財界に不測の暗雲を卷舒せざらんかを。然れども君が椽大の筆に、近代文明の背景を說盡し來り、事業と人物の批判に、精緻の觀察を將て、莊麗瑰渾の想ひを擴ぶるの時、初めて月旦の權威を認むることを得ん。

今や妖星君、燃犀の筆を呵して、一篇の冊子は成れり。其の舊著『財界一百人』と與に併せ讀まゞ、新日本の文明が、其の那邊に遡源し、將た亦斯くの如く盛觀を極むるの所以を知悉するならん。

大正四年三月

時事新報記者　岩橋信二郎

序

世に月旦の文を行るや、多くは奇矯を衒ひ、誹謗是れ事とし、徒らに讀者に媚びんとするの風あり。かるが故に其の稱揚は、一片の阿諛に過ぎず、筆一たび感情に飛ばゝ、熱罵冷嘲、妄言百出、識者をして殆んど顰蹙に堪えざらしむ。畏友遠間妖星君、頗る人物評論を嗜む。曩に其の刊行せる『財界一百人』を見しに、絢爛の文辭、達意の筆致、讀一過し來つて、殆んど卷を掩ふ能はざらしめき。而して君は更に其の近著に成る『事業及人物』を予に示して序を求む。何ぞ夫れ精力の絶倫なるや。今之を繙いて見るに、君が達意の筆は更に雋犀の分子を加味し、觀察眼極めて鋭利、批判殆んど盡きざるはなく、加ふるに瑰麗の文、雄渾の章、讀むも

のをして魅せずんば已まず。而も我が財界の事情に通曉せるを以て、玉石直ちに之れを甄別し、紆餘直截、頗る當を得たるものあり。君が公正の見、奇警の文、彼の痛弊に倣はず、嶄然として異彩あるは、正に君が得意の壇上なれば也。此の著特に專門的とせず、通俗的の叙述を以つてしたるは、我が事業界と讀書界の爲めに、君の勞を多とする所以也。

大正四年三月中浣

ニコ〳〵倶樂部にて

松永敏太郎

自序

凡そ百般の事業、其の成功と蹉跌の迹を繹ぬれば、一として其の人物の如何に因らざるは莫し。原と事業は經、人物は緯、而して之れを織るものは、則ち時と空間と也。其の成敗や逆め期す可からずと雖も、而も其の適應宜しきを得ずんば、其の功を濟すを得んや。是れ價値なる人物の詮衡を要する所以なり。

今や文明の色調、其の光彩を一新し、近代の趨向は、曩きの日の凝滯的たるに似ず、時代の搏脈は一段の高潮を促成して、生氣潑溂として横生し、世運頻りに一變して、其の文物の盛觀、方に古今を空うするの概あり。

此の時に方つて、事業の勃興を見る、蓋し大に意義なくんば非ず。

其の會社組織たること、其の個人經營たることを問はず、均しく時代の要求に促されて起れるもの、是れ畢竟文化の搏脈に一種の響動を傳へて、國家の富强と人文の發展とに有形の貢献を齎すべしと雖も、又自から玉石同架の難あり。而して之れが善惡長短の甄別は、頗る必要の條件たらずんば非ず。

夫れ人の事業を見んとするや、必ず先づ其の人物を併せ知らざる可らず。則ち事業の在る所、必ず人物を要し、人物の在る所、必ず事業の興るを見る可し。而して之れを舊に鑑み、今に知り、未に察するに於て、初めて其の眞核を究め得可し。

本書の發刊せらるゝ、固と是れが爲めにして、其の叙述、特に專門的統計を缺くと雖も、公徹に亘り、細密に入りて、其の事業の內容と、經營者の性行閲歷とに就いて、公明正大の品隲を試み、穩健着實の月旦を爲し、以つて我が戰後に於ける實業界の好指針たらしめんと欲す。冀くは江湖の士、本書發行の趣旨を汲み、敢て明鑒の榮を垂れ、以つて賛襄せられんことを。

大正四年三月

遠間妖星識

目次

彗星的人物　山本久顯と其事業……一
日本財界の覇王　三井銀行と其首脳……一四
（三井高保、早川千吉郎、池田成彬、米山梅吉）
株式仲買委員長　小池國三……一九
保險界の巨擘　日本生命保險を批判す……二三
（附り片岡直温）
紛々たる　南日本製糖の將來……三一
（伊藤政重）
青葉城下の名物男　荒井泰治……三六

噴火山上に横はれる　日清紡績の將來……三九
（日比谷、田邊對根津、宮島）
瞑すべし天下の糸平　田中家の事業……四五
（田中平八）
愛國生命の創設者　鈴木萬次郎……四九
浪花の飛將軍　高倉藤平……五二
政治界に鞍替せし　荻野万之助……五六
一陽來福の　仁壽生命保險會社……五九
（下郷傳平）
殷盛を極むる　東海銀行……六三
（菊池長四郎、吉田源次郎）
掃除屋の出廬を促す　田村正寛と嗣子順吉……六七
怪物　松谷天一坊の正體……七二
製糖界の新進　臺東製糖の前途……七八
（安場末喜）
奮鬪の權化　阿部吾市と茨城採炭……八二
北海の重鎮　吉田三郎右衛門……八五
名實兼備の　帝國生命保險の實力……八八
（福原有信）
波瀾重疊の勝利者　川北德三郎……九二
起死回生の實を示せる　日糖の經過を叙述す……九五
（藤山雷太、高山長幸、伊澤良立）

異彩を放てる　東京農銀と中山頭取……一〇一
工業界の覇王　東京電氣株式會社……一〇五（藤岡市助、綾井忠彦）
堅實主義の　共正銀行……一〇九（南條新六郎、辻川敏三）
斯界のレコード破り　大正生命保險株式會社……一一三（岡烈、金光庸夫）
關東の名門　阿由葉鎗三郎と關係事業……一一八
財界の俠骨　小野金六……一二七
復活したる　萬世銀行……一三三
兜町の新進　鈴木常助……一三七
外交通の　田野豊……一四〇
鑛山家
首位を以て表彰されたる　三五屋商店……一四三（今井安太郎）
流行の魁　松屋呉服店……一四七（内藤彦一）
海上王　日本郵船と三大戰爭……一五〇（近藤廉平、加藤正義、林民雄）
土佐系の新星　帝國實業銀行……一五六（大石保）
隆々たる哉　臺灣銀行……一六三（柳生頭取と山成東京支店長）
世界的實業家　大倉喜八郎……一六八

株式界の元老　三株式仲買店（小布施新三郎）……一七一
貯蓄銀行の成功者　不動貯蓄銀行（牧野元次郎）……一七五
疑問視せられだる　大東鑛業を解剖す（肥田景之、高野今彦、鋤柄三郎）……一七九
時流を抜ける　大平生命保險株式會社……一八六
兜町の老舗　德田株式仲買店（德田孝平、德田昌平）……一九一
斯界の巨擘　東京電燈の五幹部……一九四
輸入市場の秀雋　南波禮吉（佐竹作太郎、望月右内、神戸攀一、中原岩三郎、越山太刀三郎）……一九九
銅山王　古河合名會社（古河虎之助）……二〇三
後藤幕下の新人物　增田次郎……二〇七
澁澤男の後援ある　東洋生命保險株式會社（尾高次郎、佐々木清麿、福島宜三）……二一三
紡績界のオーソリチー　日比谷平左衞門……二一六
臺灣事業界の權威　鹽水港製糖拓殖株式會社（荒井泰治、槇哲、藤崎三郎助）……二一九
保險界の木鐸　日本傷害保險の功績（粟津清亮）……二三五
株式市場の花形　寶田石油株式會社（山田又七、渡邊藤吉、池田寅次郎）……二三九

事業界を聳動せしめたる　入山採炭の過去と將來……二三三（内田直三）
前垂式の　東京銀行……二三六（前川太兵衛、安樂勇十郎）
堅實一點張の　日本公債株式會社……二四〇（吉岡又三郎）
華胄界の機關　十五銀行の過去及現在……二四三（松方巖、成瀨正恭）
相互組織の嚆矢　第一生命保險相互會社……二四七（矢野恒太）
逐鹿場裏に現はれたる　村上太三郎……二五一
模範工場　鐘淵紡績の盛況……二五四（武藤山治）
銘刀村正の慨ある　藤田謙一と臺灣鹽業……二五八
時代に憤慨して蹶起したる　今井喜八……二六二
外粉撃退の急先鋒　日清製粉の沿革……二六五（正田貞一郎、石島爲三郎）
三百年來の名族　吉野周太郎……二六九（嗣子精一）
檜舞臺に出現したる　博愛生命保險株式會社……二七三（中島久萬吉）
面目を一新せる　東京國債株式會社……二七六（岡部潛）

逸材簇がれる　村井家と其事業……二八〇
（村井吉兵衛、村井貞之助、村井五郎）
紡績界のグレート、ハンド　和田豊治と富士紡……二八六
虚名を蛇蝎視する　大成貯金と大和株式會社……二八九
（小林寅吉）
一流銀行を壓する　豊國銀行の特長……二九三
（末延道成、坂田實、遠山市郎兵衛）
毀譽相半ばする　紅葉屋銀行……二九九
（神田鐳藏）
衆人環視の誰か鵶の雌雄を知るものぞ　日本興業と志立總裁……三〇二
内國通運紛擾の眞相……三〇五
（現重役對革新派）

目次終

事業及人物

遠間妖星著

慧星的人物　山本久顯と其事業

▼春は緗翠を疊む峥嶸の雲樹、白光に照り耀き、秋は澄徹せる九十九灣の濤の色、碧に光りて、風物宛も畫の如き南海の眺め、復たなく麗かなり。艶陽三月、南風微よ吹かば、陸には櫻桃杏李の花匂ひ、海には珊瑚の紅ぞ燃ゆる。而も一帶の奔潮、斫を拍つて過ぐる所、前は渺茫幾萬海里の濤に續きて、東には米の大陸横はるあり。幾灣の曲浦、延長實に一百里、自然の雄姿、稀れに觀る可し。若し夫れ、一脈の黒

潮、暗雲を襲ひ、風濤を捲いて、衝騰し來らば、風物轉た暗澹、濤聲岸に摧けて、正に鯨鯢灘頭に吠ゆるの概あり。

▽土佐は古へより、風光の美を以つて優る。南海の春、和げば風物駘蕩として、肌に快よきものあるも、後には大嶽峨々として聳え、交通極塞、殆んど中央日本の文明と相絶つ。是れ其の土佐人が、平生鬱勃の胸懷を回潮激瀾に灑ぎ、意氣海嶽を負ふて、放膽の士に富む所以たらずんばあらず。

▽由來土佐人は、頗る覇氣に富む。猪突豨勇は、之れを土佐人に看るを得可し。渠れは、好く機略を藏し、機に臨み、變に應ずるの思慮を缺かず、而も周匝緻密、其の出處進退に到つては、奇智縱横に馳せ、變幻出沒、此の天賦の才は、適々以つて、能く風雲の志を伸ぶるに適す。活機捉ふべく、奇利博すべし。乃ち手を擧ぐれば、機會前に熟し、眥を決すれば、籌謀立ろに備はる。斯くの如きは、是れ卽ち土佐人の特色なりとす。

▽山本久顯は、實に生一本の土佐人なり。渠れは其の特色たる覇氣に富み、機略を藏し、奇智縱横に馳すること、恐らく現代の財界に在りて、其の儔を絶つ可し。渠れに、土佐人の特色たる蘇秦張儀の辯舌は、之れを有せざるにはあらざれども、行動却つて之れに過ぎ、輕快敏捷、恰かも一機雲烟を掠めて、千里に快翔し、一彈を抱いて、財界の一角に投下し來るや、敵は其の敏活に啞然たる間に、渠れは別人の如く、徐かに長安の大路に優游しつゝあり。斯くの如きは、渠れの天品にして、其の眞面目に到つては、當に廬山の如く、容易に窺知し得べからず。

▽由來土佐人には、其の南海の波濤に看る如く、時に激灑として、麗光を漾え、時に澎湃として、暗雲を捲蓆し來るが如く、將た又た嶙峋として、山嶽重疊し、千里天險に倚るが如く、頗る多種多樣の性格を有す。而も之れを大梗すれば、一つは故伯後藤の如く、鐵血にして利益に鋭なる權謀譎詐の人格と、他は故馬場辰猪の如く、溫情壁にも譬ふべき寛厚の性情とに別ち得べし。

▼山本は此の性情を具ふるに、打つて一丸と做し、一種の新生面を拓けるは、土佐人中に在りて、稀れに見る所、其の膽量雄邁と、聰敏寛濶なるは、大に異とするに足れり。

▼渠れは、高知縣土佐の國高岡郡大篠村に生る。蚤く笈を負ひて京都同志社に學び、後ち東都に出で共立學校に遊び、明治二十年、帝國大學に入りたりしが、飜然として思ふ所あり、未だ業を卒ふるに及ばずして、米國に渡航し、オハヨー大學に投じ、再び去つて歐洲に遊び、諸處を歴訪して歸る。時に明治二十七年、偶々日清の國交に爨隙の生ずるありて、干戈相見ゆるに至りたれば、歸來神戸に在りて、新聞記者となり、姑らく雌伏して機の到るを俟ちにき。

▼戰火漸く收まりて、平和克復となるや、鬱勃たる滿腔の熱血は、渠れをして、永く晏如たらしむるを許さず、燃ゆるが如き希望を抱いて、渠れは清國に航し、上海に漢字新聞『東華報』を創刊したり。是れ渠れが處世の第一烽火たりしと雖も、一所に停滯するを欲せざりし渠れは、永く膠着することを得ず、筆を投じて牙籌を事としたりしは、比較的最近の事に屬す。

▼然り、渠れの名が、財界に喧傳したるは、實に最近數年の事にして、其の實業的生活の初一歩は、實に南日本製糖に專務取締役たりしより、一種の光燄を放ち、更に大東鑛業を創立して以來、一段の光彩は、其の過去の全歴史を通じて、最も陸離燦爛たるものなりき。

▼山本の天禀は、文筆にあらずして、寧ろ政治又は牙籌に在りき。一たび羽翼を伸べば、風雲を捲き起し、縱横無盡、恰も天馬の空を行くが如し。惜むらくは、南日本製糖の經營をして、終に渠れが辣手に俟つべからざりしと雖も、而かも渠れが英邁の經綸は、自在に劃策せられ、社務を釐整するに、功多かりしに、惜むべし好漢、其の職を全ふせずして退きしが、看るべし一流の暗潮は渠の辭職後澎湃として同社を襲ひ來り、怒濤重疊の紛擾を釀したりしことを。

▼惟ふに南日本製糖は、其の創業の時に方つて、既に其の初一歩を過ちたりき。曰はく機械の据付け、曰はく其の他の固定資本等、其の要する所のもの頗る多く、尠くとも資本金を一千萬圓と爲し、其の二分の一の拂込金額五百萬圓を要すべかりしに、僅々五百萬圓の半額たる二百五十萬圓(二分の一拂込)を以つて、漸く事業を創始したりしなど、最初より多くの蹉跌を經驗したりき。此の間專務たりし渠れの苦楚辛膽、蓋し傍人の豫想し能はざる所、亦何人か能く模し得るものぞ。

▼しかも、第二の災厄は、遽然として襲ひ來りぬ。災厄とは何ぞ。卽ち臺灣總督府の糖業政策が、中ごろに到りて、更革を見るに到りたること是れなり。其の結果、保護金の下附を斷たれたるさへあるに、次いで比年の暴風雨は、其の耕作地を荒廢するに至りて、經濟的打擊は、更らに一層に加はれり。

▼此の難關に對する、渠れの計畫は、蓋し滿幅の努力を傾倒して樹てられしものにして、當時手形の取引に對しても、渠れは自資を以つて、百餘萬圓を融通せしめ、以つて會社資金の調節に力を致したるは、世の識々者流と、其の儔を異にせるを見るべし。其の他猶ほ、据え付け機械の公定能力三百五十噸を實際能力五百噸以上に活用せしめ、其の差額約五十餘萬圓を會社の利益と做したるなど、巨細の効果を數ふるに到つては、枚擧するも猶ほ足らざるべし。

▼唯だ世上、一部の人士は、前重役等が南日本製糖に於ける、會社併合の經綸を見て、往々其の人格に疑惑の影を投じるものあり。夫等の言ふ所は、概ね皆な新竹製糖、苗栗製糖の買收が、比較的高價なりしを以つて、其の間、何等かの不正あらざりしかと做すに似たれども、當時の糖界は、頗る好況にして、事業の勃興大いに見るべきものあり。隨つて既設會社の買收には、巨額の資金を要せしもの、畢竟又た止むを得ざるに出づ。之れを以つて渠れの人格を疑ふは、餘りに呆氣なからずや。

▼大東鑛業に、社長たりし間の、渠れの功過は如何。就任以來、逐年優先株に對し一割二分、普通株に對し一割を下らざる配當を行ひ、稀れに見るの効果を齎らし來

りたりき。而も渠は大正三年九月、日夜經營の辛酸を嘗め來りし會社を引退し、之れに變はるに、肥田景之氏、任に社長の椅子を占めぬ。

▼同社が初期以來一割以上の配當を繼續したるもの、全く渠れが慘澹の經營に俟つもの多かりしに、遂に之れを辭するに至りたるは、其の理由として、渠れが手腕に依つて成れる諸般の事業、漸く其の緒に就き、更らに最も有望にして、邁進せざるべからざる事業を、前に擁したれば、今はとて、斷然辭任を決行したるなり。

▲是れに由つて、之れを觀るも、渠れが財界に鬱勃の經綸を抱いて、一所に固定せざる雄志を窺ふに足るべし。卽ち渠れは、小康に安んずるを欲せず、更らに第二、第三、第四五六の奮鬪的局面を展いて、將さに爲すあらんとする會心の壯圖、想ふだに土佐的性格の發露を赤裸々に發揮したるなり。

▼渠れの經綸は、尙ほこれのみに止まず、着眼の奇警にして秀拔なる、罕れに觀るべきものあり。曾て大阪市が、莫大の鉅額を投じて、市發展の爲めに完成したる大阪築港も、何等財力を充實するの泉源とはならず、始んど有名にして無實の觀あり。而も貿易品は皆な神戸商館の門戸を潛ること、猶ほ依然たり。輙ち富は大阪より神戸に吸收せらるゝなり。

▼一日阪地の某々紳商等來り、渠れを訪ふて曰はく、大阪の財界を賑はすの策如何と。渠れ立ろに之れに答ふるに、須らく其の築港を利用すべしと說く。某々紳商等曰はく、何に由つて、以つて能く之れを利用するものぞと。渠れ答ふらく、大に大阪に貿易の業を振興すべし。乃ち先づ其の當面の急務として、阪地の商賈相擧つて、資金を醵出し、一大貿易會社を設立するあらば、以つて其の築港を有利に供し得ると共に、阪地の財界は、頓に其の面目を一新して、活氣潑溂たるものあるべしと。其の警捷敏明、概ね斯くの如し。

▼此の一塲の說話は、果して事實として現はれんとしたりき。而して阪地の紳士は、渠れを推して、其の會社長たることを請ひ、將さに財界に一種の勢力を捲き起さん

としたりしが、時偶々歐洲の大戰となり、更らに時局は展開して、日獨の戰局となり、此の偶發的出來事は、一般財界に不測の不況を齎らし來れるが爲め、一時中止の姿となりぬるは、惜むべし。

▼財界に於いて、隱然一敵國の雄を示せる渠れの、復た政治界に於ける一大勢力たることは、聊か意外の感なからずんばあらず。然れども事實に於いて、渠れは政治上の管見に就いて、一隻眼を有することは、驚くに堪えたるものあり。故桂公の第二次内閣の際、支那に革命の時變起るや、渠れは逸早く、公桂を說いて、『清朝の宮廷と、革命志士との間に斡旋し、以つて我が百年の大計たる、東洋政策の一端を體現せしむべし』と。慫慂頗る勗めたりしが、公桂い遂巡として不斷なる、遂に千載の機會を逸するに至りたり。見るべし、中華民國が刻下の狀態は、米に頗る睹にして、我れに太だ微薄なるは、是れ確に我が一大過誤の結果にして、渠れの明、誰れか能く之れを透徹せずと云ふものぞ。

▼渠れは素と政界の出、從つて政治家との關係は、頗る密接を極む。甲下台閣の法相尾崎行雄、藏相若槻禮次郎氏の如きも、渠れの意見に傾聽し、其の卓拔の抱負を感稱して已まず、而かも一たび蹶起せんか數十の選良、立ろに渠れの傘下に萃まる。また政界に於ける潛勢力ならずや。

▼回顧す、先年東洋汽船株式會社内に暗流漲り、辯護士高窪喜八郎の起訴事件起るや、蜚語百出、爲めに同社株券は僅か數日を出でずして約二十圓の激落を來し、殆ど底止する所なからんとす。山本は之を見て財界の一大危機となし、時の法相故松田正久男に面し、膝詰談判を爲すこと約五時間、『法の適用は一に社會共通の利益を期するにあり』となし、遂に法相をして不起訴たらしむ。是れ渠の政界に於ける潛勢力の偉大なるを看取するに足ると共に其の反面渠の仁俠的氣風を示す一證左たらずや。而かも當時淺野氏に一面識なかりしに於ては、是れまた財界の一佳話として傳ふるに足るものならずや。

▼亦伯板垣に對しては同郷の先輩として遇すること頗る厚く、其の米鹽の費を自ら負擔しつゝあるは、特記するに値ひせずや。曾て伯板垣の爲めに、一萬金を投じて、雑誌『社會政策』を發刊せしむ。『社會政策』は伯の薫督に成りたりと雖も、實は伯が十年の清貧を見るに忍びず、其の伯の秘書たり子分たる某々等の爲めに、衣食の資に充てしめんとしたるのみ、また渠の先輩知己に敦きを窺知すべし。

▼由來、毀譽褒貶は、拔群卓絶の人材に向つて放たる。渠の身邊に蝟集し來れる紛紛の評隲、また然り。甲者は曰く、渠は財界の梟雄なり。大山師なり。危險地帶の人物なりと。而して乙者は曰はく、渠は覇氣滿々たる好箇の事業家なり。精力絶倫の活動家にして最も將來を有する新進人物の一人なりと。丙丁戊己以下區々紛々の評語は、其の形式を異にすと雖も、之を歸納して稽ふるに、渠が正しく常鱗凡介の徒にあらざることは明らかなり。

▼然り。渠の熾烈なる活動力と潑溂たる企業心とは、常に我が事業界に異彩の光芒を放つ所以にして、世上渠を目して危險地帶の人物と做すは、實に渠が疾風迅雷的行動の遙かに凡庸を拔き、且つ又衆人を壓するの一事に胚胎す。畢竟渠は現代實業界に於ける資金死藏の陋風打破を以て任じ、一般因循なる實業家と其の趣きを異にせるが故、時に或る一部人士の誤解を招致するものなるべし。

▼渠れ、常に揚言すらく、『予は生來未だ扶持米の味を嘗めず』と、然り渠は扶持米の味を知らざると同時に、他人の企業によりて成れる銀行會社乘り取り等の醜手段を試みず、自ら事業を企劃し、以て常に我が事業界に躍進す。渠が宏壯たる邸宅に起臥し、駟るに肥馬輕裘を以て之に充て、また常時一等列車によりて來往するが如き、また其の積極的鋒鋩の躍如たるを感ぜしむ。

▼爲人、多藝多趣味にして、通ぜざるなく、また究めざるなし。一たび高樓に凭りて微醺の頰を風に吹かすの時、美しき土佐音の情緒は巧緻なる調子となりて人をして醉はしむるあり。

▼南海の濱に生れ、南海の海潮に依りて鍛えられたる渠は、其の傳說的想像と其の英雄的血液とに育まれて、一個偉大の人格を形作られたる也、近く世界的大戰、全く其の跡を收め、平和の曙光を認むるに至らなんか、赤手空拳を以て、夙に事業界に傑出したる渠れ、爭でか躊躇すべき、必ずや風雷を起し、電雲を呼び來つて、天下に一大獅子吼するに至らん。

日本財界の覇王　三井銀行と其首腦

（三井高保、早川千吉郎、池田成彬、米山梅吉）

▼英京倫敦の一圖書館に藏せられたる紳士錄は、流石に世界的都府たる名に背かず、書中列國の縉紳鉅商を網羅し盡せり。若し夫れ仔細に之を點檢せんか、約一週間以上の日子をも要すべし。試みに我國の金傑三井家の信用程度を一瞥せんに、其の尨大書中の第七番目にあり。其の信用程度の記號は、例令へ石橋を叩かでは渡るに躊躇する程の堅造と雖も尙ほ且つ三井には絕大の信用を拂ふに足るべしと倣せり。加ふるに之れが傍註に曰く、『三井家は明治維新の國家有事に際し、特に日本政府に金融上多大の勳功を樹てたるを以つて、萬一三井家にして緩急あるも、日本政府は大に庇護すべし。故に日本政府の有らん限り、三井は之れを信用するに足る』云々と。其の言たる、現下の三井家に對して聊か穿ち過ぎたる嫌ひなきに非ずと雖も、三井が古來我國五大長者の隨一と謳はれたるより、其の國情を異にせる外人の眼光に爾かく映じたる、寧ろ當然の事のみ。

▼日本財界の覇權者は、抑も何人ぞと問はば、直ちに答ふるに三井三菱を以つてす可し。三井の我が財界に於ける偉業は、其の祖高衡氏が元祿五年、德川將軍家の出納管理者として、國內の幣制を主宰したるに始まり、爾來二百有餘年、歷代兩者の業を營み、又た大小各藩の金融に與り、夙に舊幕日本の中央金融機關として、銀行業務の卒先者たりき。三井銀行が、明治大正の財界に儼として尙は重鎭の地位に在

るもの、奚んぞ其の因由する所の淺からんや。

▼三井銀行は、明治九年二百萬圓の資本を以て設立せられたるもの、當時夙に世襲的經營の信用を博したり。其後行運荐りに發展し、明治二十六年、三井一族十一人の合名組織と爲り、資本金を五百萬圓に擴大し、更に明治四十二年七月、株式會社と改め、資本金を二千萬圓と做し、爾來財界の一角に雄視し、今日に至つては九千四百餘萬圓の預金額を示し、支店を全國樞要の各地に設け、懇切叮寧、堅實機敏の營業振りは、益々今日の盛況を促したりき。

▼民營五大銀行の雄たる三井銀行が、資本金二千萬圓、諸預金九千四百餘萬圓を有して、帝國財界に巨大の貢獻を爲しつゝあるは、畢竟二百數十年間の古き光輝に富める歴史と偉大なる功業を貽したる、三井一門の家柄的勢力たるべしと雖も、經營者に其の人物を得ずんば、爭でか能く此の光彩を發揮し得んや。

▼頭取三井高保氏は、先々代八郎右衞門の五男、嘗て歐米各國に歴遊して、銀行業務の視察を全うし、歸來三井銀行に入りて、快麗圓滿の手腕を揮ひ、行内の革新に力め、内には早川千吉郎、池田成彬、米山梅吉諸氏の如き、財界の雋秀を網羅指揮して遺す所なし。渠れが三井一族の勢力を代表して、帝國財界に滅びざる不斷の權威を示し、其功績復た縷指するに遑なからんとす。渠れは嘉永五年五月、山紫水明の京都に生る。寛宏典雅の中に、名門の品位を保ちて、國事に忠誠を致せる、眞に代表的富豪の典型と做すも、敢て溢美の賛辭にあらず。

▼更に三井銀行の中堅たる早川、池田、米山の三氏を一瞥するに、何れも當代財界の雋秀にして、花形たるの名に負かず。早川は石川縣の人、文久三年六月を以て生れ、明治二十年東大の法科を卒ふるや、特に大學院に進みて、農民金融機關に關する研究を爲し、後ち大藏省に奉職し、更に日本銀行監理官として、帝國財政の樞機に參與し、明治三十三年、故中川上氏の後を襲いで、三井銀行の專務理事となり、我が財界の勢力中心の人るとな。明治三十二年、政府の命を受けて歐米に赴くや、一億圓の

外債募集に偉功を樹てぬ。此の一事を以てして、渠が尋常凡庸の徒ならざるを知る。

▼早川氏に次げる、池田成彬の謹厚眞摯にして、些の衒氣なく、加ふるに熱誠にして、其の職に勤勉なる、眞に三井系中樞の大人物たり。渠れは羽後米澤藩の名門、池田成章氏の男、學を慶應義塾に修め、更に米國ハーバート大學に入りて、經濟學を專攻し、歸來三井銀行の足利支店長となりて敏腕を揮ひ、爾來榮進して、遂に三井系中の俊髦として、多大の期待を鍾むるに至れり。渠が第二の中川上として、財界の頭目たるは、蓋し遠きにあらざるべきか。

▼三井銀行、既に早川、池田の兩雄あり。搗て丶加へて頭腦明晰、蘊蓄する所深き米山梅吉氏を拉し來つて、殆んど鼎立の偉觀を呈せり。渠れは靜岡縣の人、明治元年二月に生れ、夙に米國大學に學び、明治二十八年歸朝するや日本鐵道株式會社に入り、轉じて三井銀行に入れり。囊中の錐や必ず穎脫せずんば已まず。渠れは忽ちにして自己の蘊蓄を傾盡したる結果、幾多の儕輩を拔き、陸離たる光芒を放射したり。而して資性公正廉直、令名を內外に藉甚しつ丶あり。三井銀行が民營五大銀行の雄者と仰がれ、時間と空間とに亘つて光輝ある歷史を作りつ丶あるもの、豈に故なしとせんや。

株式會社取引所仲買委員長　仲買委員長

小池國三

▼過般東京株式取引所仲買委員長渡邊對三氏其の任を辭し、之が補缺改選の擧あるや、幾多の候補者の現はれたりと雖も、何れも贊否相半ばし佳苒日を久ふせしも決せず、適々小池國三氏を推すものあるや、仲買人一致を以て之れを贊したりき、而も渠は後進人物の進路を開かんとして、固辭すること再三なりしも衆望默し難く遂に懇請せられて過般仲買委員長となれるは今尙ほ世人の記憶に新たなる所、此の一事を以て渠が斯界に於ける德望の如何に甚大なるかを窺知せしむるに足らん。

▼渠は長脇差を聯想せしむべき甲州甲府の人也。夙に商業に志し、十三歲にして

峡陽の鉅豪若尾逸平翁に仕へ、米穀・生絲等の取引に從ひ次で銀行部、地所部等に轉じて商海の大勢に通じ、太く若尾一門の信頼を博しにき。而して前後十有七年、同家に在りて拔群の功勞を樹て、自から商機の大綱に精なるや、上京して獨立を企て、明治三十年四月、始めて東京株式取引所仲買人となり、爾來堅忍不拔の奮鬪は克く序次顧客の信賴を博し、巨然市場の一角に雄者たるの概を示し、以つて夫の若尾派の大玉を取扱ひ、甲州系の一勢力を代表するに至る、而も營業方針を顧客本位に採り、仲買人としての職責を恪守して怠またず、尙ほ常に店員を警め誓つて思惑的賣買を爲さざらしむ。渠の名聲頓に兜街を壓し、店務の隆盛を致して幾多先輩を震駭せしめしもの、また故なしとせず。

▼昨是今非は投機界の常態なり、分秒の差を以て千萬金の輸贏を決する斯界にあり て克く萬丈の波瀾を蹴破し、聲名實力駢び進むに及んでや、渠は時代的趨勢に鑑み金融業者として各種の公債、社債の下引受け、竝に信託事業に一新生面を開拓せん事を期し、先年小池合資會社を設立したり、該社は小池仲買店の後身とも謂ふべく資本金を一百萬圓とし、多年股肱として勤續したる堀田金四郎、鳥井音吉、渡邊仁三、淺川清造、雨宮正太郎、杉野喜精、長谷川日傳、水木常太郎の諸氏に、該資本金を分ちて其の出資社員となし、以て各自獨特の手腕を發揮せしめ遂に今日の大を致したりき。

▼一見溫厚にして、人に接するや諄々と說く所、宛として長者の如し、誰か見て以て投機界の雄者と做さんや、而も機略縱橫を極めて精勵業に勗め、一面公益に貢獻し我利一遍者流と其の撰を異にす。居常身を持する、頗る謹嚴にして衣食の贅を爲さず。最も部下に厚し嘗て小池商店創立十周年紀念に際し、時に一萬圓を店員に分與し以て多年精勤の勞に報ゆるの意を致したり。而して先年來店規に反したるの故を以て退店したりし舊店員等にも同じく分與して紀念の實を全ふしたり。斯くの如き一些事、固より深く云ふに足らざるも、亦以て渠の人爲の一班を髣髴せしめずん

ばあらず。

▼曩者、小池合資會社設立以來、金融業者として主に信託事業に力を致せる渠は、百尺竿頭更に一歩を進めて資本金六十萬圓の商榮銀行を買收し、之が經營の任に當る渠が財界に翺翔して、堅實なる發展を期するの途や完しと謂つべし。

▼先年澁澤男等と共に渡米實業團に加はり、親しく金融經濟界の大勢を精査考覈して遺す所なく、歸來投機市場の覇權を掌握すると共に金融業者として財界の一角に聘睨しつゝあり。

保險界の巨擘

日本生命保險を批判す

（附り片岡直溫）

▼梨雨一過して、春筍倏忽に簇生するが如き觀あるは、今の保險界也。吾輩當局者の言に聽くに、目下出願中の生命保險會社の數は、既に廿有餘を數ふるに至れりと、南風吹いて春筍の竹と成るが如く、酷寒苦熱の下に、能く異數の發達を遂ぐるや否や、頗る疑なき能はずと雖も、時代の要求は今や財界に此の勃興の現象を促進し來りたることは、確に一事實なり。

▼抑も我が國に於ける保險會社の濫觴は、實に明治十四年に創立せられたる明治生命保險會社にして、後ち七年を經て、帝國生命保險會社の創立を見、越えて翌年七月、日本生命保險會社の創設せられたるあり、之に次いで、曰く共濟、曰く大同、曰く愛國、曰く仁壽、曰く眞宗信徒、曰く第一相互、其他三十有餘の創設を見るに至り、孰れも財界に効果を收めつゝありと雖も、就中以上の三社は鼎立して天下を三分し、以て覇者たるの雄を示すに至る。

▼其の創設の歷史よりすれば、明治は確に嚆矢者としての權利を有し、帝國之に尋ぎ、日本亦た之に次ぐを以て、日本の兩社に對する關係は、恰も隷屬的地位に居るべきに似たりと雖も、歷史は成功の前に、何等の權威を保障せず、要するに成功は

最善の雄者たることを記せざるべからず。

▼現下日本は保險契約總高壹億四千一百六十萬圓（大正三年十二月末現在）の巨額に上り、尚諸積立金二千五十餘萬圓（大正二年末現在）を示し、我が國保險界あつて以來、未曾有の記錄たるは、豈にそれ驚くべき進歩と稱せざるべけんや。

▼更に日本の財産目錄は頗る餘裕の計算になり、公債の如き買入當時の價格を依然今日に至るまで改變せざるを以て、之を昂騰せる現今の價格に計上せば、優に隱れたる財産一百萬圓に達し居れる、又以て同社の基礎の鞏固なるを示さずや。

▼尚ほそれ、日本獨特の長所は、全く他社と計算の基礎を異にせる一事にして、日本の今日あるは、一面此の點に職由すと云ふも、敢て過褒に非ず。即ち明治帝國等は、會社創業の際に方り、未だ我が國に計算の基礎たるべき死亡表のあらざるを以て、兩社は已むを得ず英國十七會社の經驗死亡表に準據して、以て之が計算の基礎を作りたりき。

▼由來生命保險會社に於ける死亡表は、事業の根抵を形成する重要の標準にして、中途容易に改變せらるべきものに非ず。矧んや東西兩人種の體質は其の根本に於て全く相同じからず。日本は夙に此の點に着眼し、苦心の結果、偶々帝大教授藤澤博士の日本人死亡統計表に基き、之が計算の基礎を定めたるは、罕觀の事實にして、頗る正鵠の方策たりしや必せり。矧んや日本は、八年前の嚆矢者たる明治を凌駕し尚ほ一歲の先輩たる帝國を壓倒して比較的短日月の間に於て、事實上斯界に隨一の勢力を扶殖し、天下に獨壇の地歩に占領するに至りたるは、等しく世人の認識する所也。

▼斯の如く、事業の隆盛を爲したる、素より由つて來る所多かるべしと雖も、一は明治、帝國等が、各々闘東の一舞臺に蹋蹐して、覇を爭へるに反し、日本は商工業家の淵叢地たる大阪の財界に地盤を固め、關の東西は素より、遠く臺滿鮮を打ちて一丸と爲し、以て鹿を中原に逐ひたるに由るべく、地の利、天の時、與つて力多か

りしを見るべしと雖も、亦た之が主腦人物の馳驅奔走、最も能く此の効果を作り來れるやを想ふ。

▼日本生命の創立は、今を距る二十有四年前に屬す、之が創立の發起人は、當時關西に於ける一流の實業家、川上左七郎、土居通夫、山口吉郎兵衛、岡橋治助、田中市兵衛、弘世助三郎、西田永助、竹田忠作、井上保次郎、熊谷辰次郎、難波二郎三郎、草間貞太郎、甲谷權兵衛、泉清助等にして、片岡直溫を迎へて創立主任と爲し會社設立當時、鴻池善右衛門は社長に、片岡直溫は副社長たり。

▼渠れ片岡は土佐の士、片岡孫七郎の二男、今の大阪瓦斯會社長片岡直輝の弟たり生れながらにして、清貧洗ふが如き中にも、手に書冊を捨てず、出でゝ近邑の私塾に入り、以て英漢學の素地を作る、更に出でゝ高知陶冶學校に入り、業卒へて敎鞭を執ること、姑らく茲に年ありき。尋いで內務省に出仕して、明治十七年、滋賀縣に轉任し累進して警部長に榮任し、從七位に叙せらる。是れ既に異數の事たり。

▼聞說く、人の世にある、猶ほ錐の囊中にあるが如かるべし、其の末、必ず穎脫せんと。渠の土佐特有の先天的資性は、早く業に國會開設の當時に發揮し、豪快にして卓犖、不羈にして跌宕の性情を露出し、出でゝ政黨に國士となり、一味徒黨と血書して、死生を訂盟したるが如き、少壯にして既に囊中に其の末を穎脫せんとしたりき。

▼滋賀縣に於ける、官海の一時代は、渠が機會を作るに絕好の試金石たりき。時の縣令は彼の有名なる中井弘にして、氣骨稜々、覇氣滿々の士、圭角人と相容れず、初め中井は渠を指彈して、人物の鬼門と爲し、渠れ亦た中井を嫌忌して、人間の暗劍殺と爲せり。而も一靈犀の氣相通ずるあるや、昨日の兩敵、相合して、肝膽相照の人となる、是れ抑々渠が財界に出づるの第一歩たらずんば非ず。

▼冠を挂げて故山に靜臥したる渠は、中井の夤緣を以て財界に出で、明治二十二年日本生命の創搏に關して、推されて副社長と爲る。當時の會社は、今日大阪北濱の

某辯護士の家宅にして、其の薄暗き二階の一室に蟄居して事務を執り上は副社長の權限より、下は保險勸誘員兼集金の事務に至るまで渠は自ら東西に奔走し、南北に馳驅して、席姑らくも溫まるに遑なかりき。今にして往時を追憶せば、一場の春夢の如く、今昔の感に堪えざらむ。其搖藍時代は、斯の如くにして過ぎ了んぬ。

▼官を辭して野に下れる渠は、猶ほ官臭の脫せざるものありけむ。紋付羽織にお役人風の頭の高きを笑はれ、鼻下の八字髯に所謂商人らしからざる尊傲の態度を嘲らるゝに及んで、渠は飄然として、道心したる滑稽事もありき。

▼渠の如才は、斯の如くにして陶冶せられたりき、故に會社の顧客たる限りは、車夫馬丁に對してすら、叩頭百遍して其の信用を博するに腐心したりき、是れ却つて渠の器の偉大なるを示すもの乎。

▼渠の前半の生涯は、斯の如くにして過ぎたり、名聲漸く大を致し、勢力愈々多を加へ來れる渠の後半生は、頗る品隲の價値多きを示さずや。今や渠は、財界に於いては天下の偉材なり。將た又關西に於ける有數の一元老たり。而して渠が社會及び政治上に於ける地位、勢力、評價及び才能は如何、是れ頗る興味深き題材たらずんばあらず。

▼嘗て獨逸伯林府に、萬國保險業者大會の開催さらるゝや、日本を代表して渡航し以て其の班席に列す。而も渠は擧げられて副議長となり、尙ほ一員として生平の蘊蓄を傾盡し、以て外人をして後へに瞠若たらしめたるは、今尙ほ內外に喧傳さるゝ所なり。

▼政治界に於ける渠が識見に至つては、遠く一頭地を拔き、早く業に鉄道國有論を主唱す、渠れ一たび議會に起つて、其の鋭舌を揮ふや、三寸不爛の熱舌、紅蓮の火を吐き、議論堂々、一糸紊れず、謂ふ所頗る肯綮に當り、敵手をして顏色なからしめたるは、今尙ほ一箇の談柄として存す。先年帝國議會に於いて、山本藏相に對せし渠の財政問題の求問が、如何に談論風發の壯觀を極め、殆んど藏相をして、一

言隻語の辯解を許さゞりし、英氣颯爽の風姿は政界稀覯の一現象として、激賞措く能はざる所なりき。

▼要するに、渠は飽く迄も躬行實踐の士なり、精力主義の士なり、勇往邁進の士なり、奮闘主義の士なり、男子の苟くも尚ぶべき所以は、輙ち此の點に存するとせば而も日本生命の社運、益々隆盛の域に赴く所以のもの、豈に夫れ偶然なりとせんや

▼古人は曰はく、天の時、地の利、人の和と、此の三者兼ね到らば、天下功名唾して取るべき而已、成功必ずしも期し難からんや、是れ宇宙眞理の根元たらずんばあらず。

▼日本生命は、能く此の眞諦を悟徹したり、若し此の中、其の一を缺き、其の二を缺き、其の三を缺かば事業は泡沫の如く、早く財界より消滅したるならむ、是れ畢竟社長たる人の器宇、素より宏大なるに由るべしと雖も、職として、同社主腦の人物が、各々其の粹を發揮しつゝあるに由らずんばあらず。

▼主腦人何を誰れとか爲す、曰く取締役兼第二部長橋本重幸、曰く第一部長久世庸夫、曰く第三部長岸田杢、曰く東京支店長淺岡雄之助、曰く京都支店長野村光貞、曰く臨時取調局長森村金造、及び醫局長遠藤外三郎等とす。

▼今や同社の社會的勢力は、絶大の域に擴張せられ、夙に保險界の翹楚を以て仰がる、而も其の營業方針は、他と其選を異にし、健にして實、極めて能く長所を文明諸國の例に取り、短を我が國保險界の傾向より棄てゝ、嶄然として天下を睥睨し當に一敵國の概を示す、然り、而して此の隆盛を致したるは、社長片岡初め、創立以來盡瘁せる重役諸氏、與かつて力多きに因ると雖も、同社砥柱の主腦的人物の一致和合と、絶倫なる才幹の發揮なかりせば奚んぞ今日の隆盛を致さんや、吾輩は日本生命保險を批判し來つて、其の功を渠等人物の上に歸せんと欲す。

紛々たる

南日本製糖の將來

（伊藤政重）

▼先年、製糖事業の勃興するや、天下齊しく製糖會社の有利なるを思ひ、一攫巨利を博し得べしと、爾來新會社は、宛も雨後の筍の如くに起りしこと、近時生命保險會社の濫興と相等しかりき。是れ時の臺灣總督府が、外糖驅逐の糖業政策を採り管下製糖會社に對して、相當の保護援助を與へたりし結果ならずんばあらず。茲に於てか實業界の諸名士にして、其の製糖會社に走らざりしものは、殆んど稀れなりき。然れども自然淘汰は、茲にも其の消長の跡を示すありて、さしもの好況を以て迎えられたる幾多の社も、遂に秋風蕭索、宛から現時に見る幾多生命保險會社の靑息吐息の窮境と同一軌に出でゝ、或るものは他會社に併合せられんとし、又た或るものは瀕死の危地に沈淪しつゝあり。知らず、南日本製糖株式會社や如何。

▼同社は糖業熱の高潮時代に方り、財界の飛將、竹內綱氏を始め、根津嘉一郎、前川太兵衛氏等有力なる一派によりて發起創設せられたるもの、資本金五百萬圓を有し、株式募集當時二三圓のプレミアム付を以て滿株の盛況を呈したるなど、頗る將來を囑目せられ、創立後に於いて、必ずや、少くとも一二割の配當はあるべしと期待され居たるに、須臾にして事實は逆轉直下、兎角の評判をさへ招き、兜町市場にては、暴落に次ぐに暴落を以つてし、今や三十圓拂込の同社株式が、僅八九圓臺の安値を現出しつゝあり。從て其の株主總會や、屢々紛擾を起し、其他株金拂込にも亦た物議の種を蒔き、實績頓みに擧がらず。遂に一昨年に至りて、大株主等晏然默過すべからずと、株主協議會開催の結果、其の席上竹內社長を始め專務取締役山本久顯、常務增田次郎の諸氏引責して連袂辭意を決したりしが、偶々、澁澤男爵等の盡力斡旋を以て、前川太兵衛氏一派の手によりて整理しつゝあり。

▼同社が、斯の如く悲觀せられたる眞因は、臺灣總督府の糖業政策が遽然豹變して遂に會社に對して、何等保護を與へざるに至りたるが爲めと、且つ其の社の所在が新竹廳下に在りて、南部の甘蔗地に遠ざかり、北郡の米產地に緣故薄く、所謂地の利を得ざることと、及び既設會社の買收に割高の支出を爲したること、加ふるに

暴風雨の爲めに、甘蔗の凶作を招けると、時適々糖界の不況に赴ける等、種々の原因に坐せり。其の悲運たるや、自然的趨勢にして、決して白蟻的重役等の人事的侵蝕に由りしに非らず。

▼先年來の我が製糖界は、常に暴風雨の災害を蒙り、一般同業會社にして甚大なる打擊と創痍を受けざるは無かりき。況んや堅實を以て許されし大會社に於いてすら屢々經營の困難を感じ、僅かに全盛時代の積立金によりて、辛くも其の缺損を彌縫し塡補しつゝありしをや。

▼今や、甘蔗豊作の時期は到來し、糖界の前途益々多望ならんとするに方り、同社が多年劃策したる實力以上の設備も、始めて其の効を顯はし、特に同社經營上、最も適切有利なる精製糖事業も、去歳、重役伊藤政重氏の奔走盡力によりて其筋より製造認可を受けたるより、頓に一陽來復の徵を呈し來れり。尙ほ社長には財界の有力者前川太兵衞氏を戴き、着實穩健を以つて主義とせる常務原虎太郎氏、土木建築業者にして又た同社大株主たる安藤組代表者西村治永氏支配人として東京に社務の整理に力め、尙ほ臺灣本社には、臺灣製糖界の大立物山本悌二郎氏の推薦によれる取締役高津松次郎氏等社業の擴張を圖り、更に常務たりし伊藤政重氏が常任監査役として、社業の發展を企畫しつゝあるに至つて、同社の將來は洋々として春海の如き觀なくんばあらず。其の必ずや昨非今是の反動的發展を現出するならん。

▼同社常任監査役伊藤政重氏の同社に於ける功勞に至りては、改めて絮說するの要なきも、特記すべきもの啻に二三に止まらざるあり。就中同社の事業か、獨り粗糖製造のみを以て發展の一策となさず、百尺竿頭更に一歩を進めて、極力奔走の結果、總督府の認可を得て、精製糖製造の創始を企てたる先見と機宜を得たるの措置大に渠れの爲めに稱すべきにあらずや。渠は社長前川と其の鄕を同うせる山梨縣の人、春秋正に三十八、曩に中央大學を出で、二十一歳にして直ちに判檢事試驗に及第し、先づ横濱地方裁判所に赴任し、次いで臺北地方法制院に名判官の令名を博し

日露戰役當時、軍事囑託として滿洲に赴任したることあり。後ち官を辭して辯護士となるや、機鋒雋鋭、覇氣横溢、全臺を睥睨し、又た全臺日報を經營し、後ち南日本を始め臺灣殖産　臺灣蓄財の株式會社設立に盡瘁し、其の重役として臺灣事業界の振興に力め、其他臺北學院專務理事、實業の臺灣社主幹として、明快の頭腦、果斷の才能を發揮して、令名を全臺に嘖んならしめ、或は支那革命黨の頭目等と交欵を結び、以て慧星的人物たるの名を博したりき。

▼今や總選擧に際し、鄕里山梨縣より再び立候補を名乘りて逐鹿場裡に馳驅しつゝあり、識見、力量、手腕の凡を拔ける渠、若しそれ政界に翺翔せんか、優に政界の一名物たらん。

青葉城下の名物男

荒井泰治

▼去歳、海軍收賄事件の爆發するや、上下擧つて苞苴の醜を謳ひ、窃かに自ら戒飭したりき。夫の臺灣の成功者荒井泰治は、夙にコンミッションの排斥者として、第一人者の地位に在り。渠れはサミュル商會に入りて今日の基礎を固めたり。渠を知らんとせば、先づ渠のサミュルに入りたる動機を知らずんばあるべからず。

▼始め渠れは富田鉄之助に知られて日本銀行に入り、更に朝吹英二の推擧によりて鐘紡に支配人たりしが、偶々同社が紡績器械をサミュル商會より購入するに方り、同商會より提供したるコンミッションを峻拒して收めず。之に相當する價額を賣買價額中より控除して會社の利益を圖りたりき。由來歐米人はコンミッションを以て一般商取引に於ける慣例として毫も怪まず、殆んど尋常茶飯事と做せり。而して渠が嚴乎として、コンミッションを峻拒するを見る。渠の至誠廉直、一身の利害を抛つて圖るに會社の利益を先にしたり。是れサミュルが大いに渠れを感嘆し遂に懇請して臺灣支店長に聘したるなり。此の一事また渠を月旦するに好個資料たらずんばあらず。

▼渠れはサミユルの臺灣に支店長として在ること前後九年、同商會の爲めに圖る所頗る多かりし外、在臺邦人の無氣力にして、富源の開拓に疎きを見るや、遽然同商會を辭し、猪突事業界に入つて、天稟の機鋒を發はし、縱横の才略と、絶倫の精力とを傾注し、以て鹽水港製糖株式會社の創立に從ひ、其の社長として敏腕を揮ひ、我が糖業政策に貢献する所多かりし、而して尙ほ臺東拓殖、打拘整地、臺灣肥料、大正生命保險等の諸會社等の設立經營を始め、あらゆる臺灣事業界に奮鬪奔馳して怠らず、總督府の產業政策に基き、屢々後藤男等の當局と交渉して同島の施設に資したること極めて多し。故に一部渠を評して貧緣請託に由ると做すものあれど、未だ盧山の眞面目を知らざる徒の岡眼八目なり。

▼嘗て北海の寒野に心膽を錬り、中ごろ帝都に入りて雌伏し、徐ろに異日の雄飛を企てる渠が萬物草創時代の臺灣實業界に於ける飛躍や、蓋し異數なるもの、誰か以つて僥倖とせんや。往年鐘紡の支配人より、東京商品取引所の支配人に轉じ、更に富士紡績の創立に參與して努力したるは江湖知悉の所、假令ひ渠れはサミユル商會に入らずとも、猶ほ優に內地財界に翱翔し、花形役者たるの地位を占むべきもの、奚ぞ概評一番して臺灣成功者とのみ做すべけんや。

▼渠れは夙に中江兆民門下の俊才して、富田鉄之助に風鑑され、或は勝海舟に私淑し、政論家として觚を毎日新聞に操り、既に臺灣事業界に成功し、今や政界の樞機に立ち、また東北事業界に巨腕を揮ひつゝあり。其の鄕里宮城縣多額納稅議員として貴族院に一勢力を占め得たる渠れ、何んすれば長く青葉城下に眠獅臥虎の態を學ばんや、曩者東都江戸川畔に宏壯の邸宅を構え、綽々として餘裕あるを示すも、機會一たび熟せんが暗中の一大飛躍は政治實業各方面に涉つて展開せられんとす。

噴火山上に横はれる

日清紡績の將來

（日比谷、田邊對根津、宮島）

▼我が紡績界の新進、日清紡績株式會社に於ける重役對社員の紛擾は、正に是れ資本家專横派の頭目たる根津一派が其の滿々たる野心遂行の目的に向つて開かれたる斥候戰たらずんばあらず。見よ果然日清紡設立以來の歴史と前重役の功勳とを蹂躙せんとせる侵略戰に對し、江湖識者の間に既に批難の聲を聽くを、斯くの如くして根津一派の籌策、中途にして挫折せんとするものゝ洵に故あるかな。

▼世上傳ふるあり。根津は同志會系にして兼ねて甲州派の驍將なり。而して日清紡の實權者田邊前專務は政友會系に屬し、兼ねて越後派の俊髦なり。その甲越相閲ぐもの、畢竟歴史的姻緣に由り、而も政爭上の確執は政治道德上當然のことに屬す加ふるに根津が和田氏と通じ、田邊が武藤氏と好きは、是れ素と和田對武藤の暗鬪を語るものなりと。嗚呼這個の風説果して肯綮に當れるや否や。

▼云ふ迄もなく、日清紡は日比谷翁の半生の努力を傾倒し、尋いで田邊專務が献身的經營に由つて今日の大を致せしもの、其の越後派たると否とを問はず、翁と田邊前專務の功勞は牢乎として拔くべからず。社員と職工の多數が田邊を信賴し、其の指揮を仰がんとするのは人情としては當に然あるべし。此に於てか、田邊一派を排斥せんとする根津一派に抗して、會社設立以來の主義方針を遂行すべしと做し、餘沫遂に飛んで會社の紛擾となりたるは、蓋し已むを得ざるものありしなるべし。

▼根津一派は、素と是れ野心家にして、常に思惑的の投資を試み、特に會社の實權を握取し、機を見て以つて自已の收利に、其の總べてを犧牲に供し去らんとする者其の冷酷傲岸なる、部下に一人の股肱なきに見ても窺知せらる。其の始め日清紡株の有望なるを見るや、一擧して二萬餘株を買占め、以つて思惑的の奇利を博せんとし、其の計成らず。又其の後不可抗力の爲めに、會社の成績良好ならざるに乘じ恣に會社重役の非を鳴らし、自ら顧問となり、進んで自己一味の徒を重役とし、遂に會社乘取策を講じたるは、是れ洵に紳士として恥づべきこと也。

▼日清紡に於ける昨年上半期決算の佳良なちざるは主として内地向紡績糸の需要尠

さに出で、毫も田邊前專務以下前重役の責に歸すべきものにあらず。且つ夫れ田邊の如き身政友會所屬の前代議士なりと雖も、事業上に於ては毫も政黨的色彩を帶びず。公平無私、孜々として社務に鞅掌して倦むことを知らず。而も部下を統御するの才あり。多數の社員職工にして、田邊前專務を見ること、恰も慈母の如く、敢て命を聽くことを喜ぶの風ありき。吾人は同社設立の沿革に鑑み、田邊氏を今尚ほ專務たらしめんことを望むもの、一個の感情にあらずして、同社竝に株主多數の利益たるを信ずればなり。

▼昨年元東京紡績專務たりし宮島清次郎が、入りて重役となり、根津側を代表して其の專務に就任す、宮島は野州の人、明治卅七年、常大出身の法學士、學を卒ふるや住友鑛山部に入り、後ち岳父田村利七氏の推薦により、東紡の事務長となり、爾來常務取締役を經て專務となり、彼の東京紡績をして尼ケ崎紡績に合併せしめたるの人。其の新進の學才は、自他俱に許すべきも、事業經營に就て之を見れば、田邊に籌を輸すること啻に一二にあらざる也。

其地位聲望、斯界に在りて嘖々たる田邊を拉して、宮島の後へに伍せしむる事既に冠履顚倒せずや。而して田邊氏たるもの、果して克く平取締役たるに甘んずべきか

▼日清紡が過般の紛擾を惹起せることは、正に資本家專横の一兆候として排除すべき也。偶々二三の新聞雜誌は、蹶起して根津一派に攻擊の文を放つあり。洵に以つて實業界廓清の鋒火と謂つべし。而かも根津派を、之を以て福澤桃介、田邊熊一一派の使嗾に出づるものと做すものゝ如く、其の偏見笑ふべしと雖も、是れ即ち自己の魂を以て他を律せんとするもの、其の觀察の淺薄にして陋醜なる、愚も亦た遠く及ばざるに似たり。夫の田邊は實業家として天賦の才幹を有ち、日清紡の將來を有望たらしめんとするの念爾く熾烈なるもの、爭でか兄弟墻に相鬩ぐ底の愚を學ばんや、田邊の苦衷寧ろ察するに餘りありと謂ふべし。

▼田邊は新進實業家たると同時に一面政界の流行つ兒たるを失はず、之を現下の梨

園界に比儔せんか、正に六代目尾上菊五郎に髣髴せずや、其の技、其の名未だ高麗蔵、梅幸、羽左衛門等に及ばずと雖も、今や賣り出しの花形として、斯界の人氣を一身に萃めたる所、太甚だ相似たらずや。

▼渠れ二十二歳の一青年を以て能く町長の職に就きて自治政の妙諦を發揮し、次で縣會議員として縣政に參與し、更に郷里新潟縣より選出せられて議政壇上に侃諤の識見を披瀝したるはまた言ふを須ひず先年全國紡績聯合會の意見を代表して、政府提出の工場法案を改訂せしめたる颯爽の態度や渠れの聲名をして、よく多く籍甚たらしめき。

▼越後人の特性たる奮鬪宗にて鍛へ上られたる渠れの日清紡に於ける功勞たる、既に如上の如し。夫の日比谷翁より無擔保にて百數十萬圓の流動資金を融通し、以て會社事業の發展を圖りたるが如き、其の一般を窺知せしむるにあらずや。

▼同社が渠の專務辭任後、專ら消極的方針を以て經營の社是と爲し、只管營業費の緊縮を計り、以て得々然たるが如きは、これ戰々競々たる小人物のタイプにして田邊の大局打算的の經營に比して霄壤の差も啻ならず。果然同社が日比谷翁より百三十萬圓の債務履行の請求を受け、遂に工場等を擔保に提供したりし一事また這間の消息を穿がち得て餘りあらずや。常務に田邊を逸したりし同社の命運や、まふた冥々乎たらずや

▼惟ふに日清紡が現在に於ける鎮靜狀態は、恰かも一時的休止を爲せる噴火山と見るべし。其の周圍の狀勢に激發せられて、財界に其の爆發的鳴動を起さんか。將さに迅雷疾風的の一大禍亂を捲蓋し來るべし。其の新重役の根津宮島一派たるもの、豈に夫れ猛省せずして可ならんや。

嘆すべし
天下の糸平

田中家の事業

（田中平八）

▼『天下の糸平』の名と共に、縱横の奇才、豪邁の膽氣を謳はれたる故田中平八が、明治の初年、夙に商界の風雲に乘じて、奮鬪力戰し、遂に時代の寵兒となりて巨萬の富を累ね、一世を睥睨したる勇姿は、實に古今獨歩の概ありき。而かも渠の遺業は、歲月の推移と共に、鬱然として榮え、田中家の一門をして、彌々榮福を增進しつゝあるは、渠の賚たらずんばあらず。

▲東京日本橋區坂本町の田中銀行は、實に渠れが金融界に足を踏み入れたる紀念の事業なり、同行が明治十六年十月に設立せられ、爾來茲に三十有餘載を閲しむ。而して資本金は僅々五十萬圓の全額拂込なるも、資金の集散、營業取引の堅實にして江湖より甚大の信用を受けつゝあるが如き、以つて當年の『天下の糸平』を偲ばしめずんば非ず。

▼田中家の事業たる豈に一個の田中銀行のみならんや。夫の帝國貯蓄銀行の如き或は又た大正二年十一月資本金三百萬圓を以て設立したる田中鑛業株式會社の如き何れも田中家の經營に係る重要事業たるを失はず。同社經營の鑛山は、北海道に於ける國富鑛山、轟鑛山、青森縣の安部城鑛山、西又鑛山、山口縣の玖珂鑛山、宮城縣の本山鑛山、滋賀縣の土倉鑛山等、其の主要なるものにして、其の金銅の採掘高は、一ヶ年百八十萬斤以上に達し、其他試掘地も亦た尠なからず。而して前記鑛山中、青森縣安部城鑛山の如きは、銅質良好なるのみならず、鑛量豐富を以て將來を囑目せられつゝあり。鑛山事業に於ける月產額は二十八萬斤以上に達し、大正元年十一月より、更に製煉事業をも創始し、鑛業界の視線を鍾めつゝあり。而して田中家が、明治二十一二年頃より、一般鑛業の經營に着眼し、爾來二十有餘年の奮鬪的經營に由つて、斯くの如き良成績を擧げ、『天下の糸平』の名をして、更に彊然なる光彩を放射せんとするに至れり。

▼惟ふに先代平八氏の如きは、所謂創業の模範的人物と稱すべく、其の事業上に於ける經綸の才と、企劃の能とは、能く幕末より明治維新當初に至る變亂極まりなき

世に處して、嶄然一頭角を顯はしりたき。而して當主平八氏に就いて見るも、渠れは乃父に見るが如き創叛時代に於ける奮闘的勇將と云はんよりも、寧ろ治平の世に處するに、最も適當なる材たるを想ふ。現今田中家の營業振りが、勉めて華美を避け萬事着實を旨としつゝあるば、偏へに當主性質の然らしむる所、以つて夫の先代が活躍一番して、風雲を叱咤し、龍虎を擊挙する底の壯觀は見るべからざるも、春風麗日に帆を揚げ、悠々千里の長江を下るが如き運用の妙は、現時實業界の機宜に適して其の實力の根抵、年を追ふて深きを加へつゝあるや言を待たざるべし。

▲渠は先代の嫡男、倜儻にして大志を有するも、重厚寛濶の風あり。最も虚榮と衒耀を避けて、新聞雜誌紙上に謳はるゝことを忌む。故を以て聲名、未だ汎く江湖に藉甚せずと雖も、這間既に渠の偉材たるの一端を端睨すべきにあらずや。去秋都下の某實業雜誌、朝野名士に檄して、歐洲大戰亂が、果して何れの日にか終熄すべきの意見を徵したるに、或は糧食上より打算し、或は軍費上より論究して、三ケ月、半ケ年、乃至一ケ年以上に長引かんことを公表して、私かに誇示の色ありしも渠れは獨り世界列强間に於ける大戰爭の如きは、これ人間の力を以て臆測すべきにあらずとなして答へたるが如き偶々以て渠れが如才なく、而かも才智の人たるを證すべきにあいずや。

▼世上、渠れを知るものゝ稀れなるは、これ猥りに人に面せず、又漫りに自已を吹聽せざるが故也、要するに先代田中平八を徳川家康とせば、渠は二代將軍秀忠に比すべく、また守成の偉材たり。

愛國生命の創設者　鈴木萬次郎

▼現農相河野磐州と雁行し、初期以來代議士に當選せること六回　終始東北政界の大立物たる愛國生命保險株式會社長鈴木萬次郎氏は今次の總選擧を期とし、我が東京市に立候補を名乘りて、今や鹿を中原に逐ひつゝあり。而して渠を推薦するもの

は、東京菓子製造業者、醫師團、東京藥種商の有志、保險界の有志を始めとし、個人としては大隈首相を筆頭に大浦、加藤、若槻、一木、尾崎、河野、武富等の臺閣諸公、並に箕浦勝人、島田三郎、仙石貢等の諸名士を以てす。東北福島縣に於て屢々選良たるの榮譽を擔ひ、侃諤の論鋒、よく議政壇上の一偉觀として名聲江湖に藉甚たる渠が其の積年に渉れる政治的地盤を抛ち、今や馬を中央帝都に前めて、其の雄心壯圖を披瀝し、以て信を東京市民に問はんとするの意氣は、曾て渠が白面書生の身を以て、自由民擁論を唱道し、故馬場辰猪、末廣重恭等と交游あり、慷慨悲憤、眞に國士の風ありしことを想見せずんばあらず。

▼惟ふに渠が菓子製造業者に推されたるは、實に夫の愛國生命保險設立以前よりの關係あるに因れり。即ち同社は、往年菓子稅廢止の紀念として創立したるもの、而も菓子稅廢止運動に際し、渠が急先鋒として成したる功績は、較明顯著なるものあり。同社は斯の如く渠によりて設立せられたるもの、設立後渠は、入りて專務取締役となり、次で社長となれるもの、初め渠の同社に入るや、よく經營的手腕を揮ひ現に諸積立金七百有餘萬圓、保險契約高五千餘萬圓の巨額に達せしめ、先年日比谷原頭に巍峩なる一大建築の壯觀を現出したりしは、社運隆昌の證左にして、一面渠れが實業界に於ける手腕と抱負の非凡なるを知るべし。

▼政治、實業の兩方面に傑出したる渠れは、多才多能適く所として可ならざるなく兼ぬるに强記博聞なるは、既に世に定評あり。豈に亦吾人の言を待たんや。京童の謳ふらく、ドクトル　ハーゲマンと一語揶揄するに似たりと雖も、實は然らず、由來渠は仁術を以て起てる國手、現に神田町神保町の病院神●●●院は、これ實に渠の經營に係るもの、尙ほ稻毛の養生園に多數患者を收容し、以て精神的療養を施し、我が醫界に一新生面を開きつゝあるは、刀圭界の認むる所、今次東京醫師團が、其の代表として渠れを推薦したるは、眞に其の適材たるを認めたるに由らずんばあらず。

▼渠が嘗て河野農相と初期の總選擧に於て、共に福島縣に選良たるの榮を擔ひ、其の文明思想を傾倒して議會に臨むや、絶倫の精力、朗々の雄辯、以て渠が天資既に政客たるの風姿を現示し、其の禿頭に因みて、世俗渠に、ドクトル、ハーゲマンの名を冠せしめ、以て議會の一名物と做せりき。今や政籍を同志會に置き、其の公認候補として輦轂の下、敢て逐鹿裡の人となる。曩者議會の一名物藏原赤チョッキを當選せしめたる東京市民は、更に渠を推して東都に新たなる一名物を許し得るや否や。

涙花の飛將車　高倉藤平

▼關西金融界の巨擘、北濱銀行の破綻に瀕せんとするや。蜚語流説百出し、遂に頭取岩下清周を初め、常務小塚正一郎以下一味徒黨の拘禁を見るに至り、同行の前途は一簇の暗雲に鎖されたり。而して世人は其の失態の大なるを見て、恰かも往年の日糖會社を聯起したり。而も此の際彼の藤山雷太なるもの拙きに方り、堂島取引所理事長高倉藤平が輿望を負ふて起ち　入りて同行に頭取となり。斯くの如く渠れが江湖に加量才幹を認められ、今や關西の財界に雄飛せり。

▼渠は夙に『不可解』を以て稱せらる。即ち投機市場に於けるや、變幻出沒の妙を盡し、且つ其の出所進退、宛も電光石火に似て、容易に人をして端睨せしむるを許さず。固と投機界の事や、奇策縱横を要す。而してその運命の變幻や、極まりなきは殆んど常人の夢想だも及ばざる所、渠れを目して『不可解』とのみ言ふべけんや。

▼泉州岸和田の一木綿商の悴たる渠れは、空拳を以て起ち、能く富鉅萬を累ね、今や株式界の驍將者宿として、天下に謳はるゝに至れるは其の偉大なる人格、俊邁なる手腕に由るものにして、才機縱横に馳するものあれば、遂に渠れを目して『不可解』と做せるものか。

▼明治三十四年、渠れ始めて大阪堂島に現はるゝや、新進氣鋭の壯圖、一擧して勁

敵を屠らんとせしも、天一坊松谷の卷添えとなりて、脆くも一敗地に塗れたりき。さはれ窮通は道なり。渠れ一夜京都の四條橋畔に佇立して瞑想に耽り、徐ろに來し方行く末に思ひを回らし、月下鴨水の淙々たるを聽くや、胸裡一點靈犀の相通ずるありて、心氣初めて濶然、再び米穀市場に馳騁するの覺悟を抱き、越えて明治三十六年、再び堂島に旗上げを爲し、翌三十七年、長驅して馬を北濱の株式界に進め、旗鼓堂々の陣營は流石に邊りを拂へり。偶々日露戰役後の市場、熱狂して暴騰するや、渠れ豬突縱横の應戰振りを示し、一舉數百萬圓を贏ちて、成金の旗頭たりき。

▼渠は成金黨となれるも毫も驕奢の色なく、倏忽仲買人を辭し、翻つて堅實なる事業界に投じ、以つて身後の計を爲し、徐々に事業の企策に從へり。即ち堂島取引所長崎米穀取引所、大日本冷藏會社、伊勢電鐵、浪速火災等に一臂の努力を致して、其の經營に資し、次いで金融界に一大飛躍を試みたりき。渠が仲買人を罷むるも、時に黑幕として市場に正權二道の策戰を試むるは、蓋し渠れが滿腔の覇氣、抑ふべからざるものあるに由るか。

▼渠は比年京阪實業界の樞軸となり、隻手尙ほ堂島取引所理事長として斯界に雄者たるの概あり　最近岩下清周失脚の後を受て隱然其重きを爲したるは事實也。而して

▼渠れの嗜好たるや何の稱すべきものなく、日々兀々として事業と終始するを樂めり。渠れが窮餘に際し、僅々二金を貸與せられたる等に對して、終生の恩人なりとして、今尙ほ某の家計を助け、以つて昔日の情誼に酬ひつゝあるが如き、或は歌妓一光あるものゝ意氣に感じて、千金を與へて平然たりしが如き、豈に徒らに自家廣告とのみ見るべけんや。

▼如今松本重太郎、藤田傳三郎等逝き、士居、小山既に老い、岩下は失脚して、大阪財界は、滿目轉た蕭索たり。此際、渠れは勝ちて兜の緒を締め大いに關西に雄飛せんか、蓋し刮目に値ひするもの多からん也。

政治界に鞍替せし

荻野万之助

▼選良として議政壇上に起たんには、必ずや經世濟民の抱負を有し、識見學才、相共に選良たるの素養無からずんばあるべからず。今次の總選擧に於て、其候補たるもの、全國を通じて七百有餘人を算したりしが、果して能く理想的選良たり得るもの幾人ぞ。而して我が東京市に立候補を宣し來れるもの約三十人、就中荻野万之助氏の如きは、確に理想選擧を標榜せるものと謂はざるべからず。

▼渠れは牛粹の江戸ッ子にして、快活の資性を有す。更に之れに加ふるに新文明の頭腦を以てし、人格手腕、復た兩つながら備はると稱せらる。渠が嘗て私學の双璧たる早稲田大學竝に慶應義塾に學び、進んで海外留學の壯圖を抱くや、先づ米國に航し、華盛頓大學に入り、政治經濟學を專攻し、轉じて獨逸に赴き、伯林大學に於て、政治學を研究して夙に經世家たるの學術を蘊蓄す、後ち遠大の抱負を擁して歸

朝するや、大倉組に入り臺灣支店長として同島に赴任し、初めて實業的才幹を實地に試みて、功績大いに見るべかりしは、確かに渠の高遠なる理想の一班を窮知し得べし。

▼突如渠れは大倉支店長の職を抛つや、急遽東都に歸來し、大正四年の一月元旦を期して、立候補の名乘りを揚ぐ。是れ渠が近時の政局が妥協是れ事とし、未だ絶えて政治の眞意義に逢着せざるを慨し、挺身政界の廓清を以て任ぜんとせるが故のみ。渠が主として政見發表の演說會を開き、自ら立候補を宣し、蘊蓄せる絶倫を縱横論議し、以つて一般候補者をして後に瞠目たらしめつゝあるを見るも、如何に理想的候補たるやを窮知すべし。

▼如今、東京市に逐鹿界にあるもの、約三十名、素より帝國首都の選良たるべく、其の人格や高邁、其の手腕や卓越、而して學才雋秀を極め、其の經歷の如き、燦として光輝を放ち、直ちに其の爲人の非凡なるを想はしむ。由來代議士は名譽榮冠の

代表にあらず。又た床の間の置物にもあらず。爭でか經歷の有無多少を以て甲乙すべけんや。眞に代議士たるものは、一に立法機關に參與し、一國政治の利害得失に關して一隻眼を具有する經世家にして、初めて眞に立憲治下に於ける理想的價値を有す。渠が畢生を政治界に繫ぎ、以て歐米大學に學びたる政治學に、其の卓越せる抱負を加味し、以つて我が政界に之れを實行せば、必ずや識者をして驚歎せしむるものあるべし。

▼渠れの出生地たる日本橋區の中心吳服町に據りて、江戸っ子のチャキ〳〵たる魚河岸の哥兄連中の後援を待ちて頗る優勢なりと稱せらる。更に中正會公認候補として全市の各區に飛檄し、且つ全市各區に亘りて政見發表の演說を爲し、公正堂々の戰陣は、眞に馬上顧眄の概あり。由來日本橋を根據せるものに、高木益太郎、星野錫、鈴木梅四郎等あるを以て、渠の奮戰振りや、花々しく且つ凜々しきを要せんも、渠が穩健公正の政見は、よく東都清議公論の士に歡迎せらゝるを以て、其の中原獲鹿の月桂冠を得ること、敢て難しとせざるべし。吾人は渠が大正政界の風雲兒として一方に雄視することの近きを疑はざる也〻渠れ體量實に十八貫目を有せり。而して政界に重きをなせるは、蓋し其の體量に相應はしきもの乎。

一來復の陽　仁壽生命保險會社

（下郷傳平）

▼生命保險會社が、個人の不幸に際して、慰藉の道を拓くは、詮する所國家社會を益するなり。是れ保險業者が一國の財政、並に經濟政策に重要なる地歩を占めつゝある所以たらずんばあらず。

▼往年、英國が、杜國と開戰せんとするや、先づ政府が國内の生命保險會社と意見の交換を爲し、其の協議を待つて宣戰の布告を爲したりしが如き、これ生命保險會社が立國經世上に重要の關繫を有するが故なり。尙ほ米國の一大保險會社は、其の

勢力を中央政府の施政以上に占め、會社の意見は、直ちに國家の政策を左右するの勢力あり。其他歐米元首を始め、貴族有力者が、擧つて生命保險と契約せるが如きに徴するも、斯業の社會的關係が、如何に重要なるかを知るに足らん。惟ふに生命保險會社が、銀行業者に先ちて、國家有事に際して貢献すること、大なるを以つて、遂に爲政者をして、保險會社の意を參酌するに至らしめたる也。翻つて我が保險界を見るに、時代的流行として、新會社は濫興し、或は其の經營に艱めるもの、實に十四五に下らず。而かも先年仁壽生命が松谷天一坊一派の爲めに攪亂せられんとして、遂に其の難關を蹴破し、以來好成績を收めつゝあるは、斯界の爲め欣慶とせずんばあるべからず。

▼仁壽生命保險は、我が教育界の元老、辻新次男等の首唱によりて、設立せられたるもの、其の營業振りは、堅實なるを以て稱されしが、先年端なく大紛擾を起し、一時社業蹉跌の觀ありしも、改革派の奮鬪に依り、前專務長鄉泰輔一派を除名し、現社長下鄉傳平之に代り、尙ほ改革に殊勳ありし山口久四郎、吉澤絆三郎、伯爵松平直亮、三野村倉三の諸氏、重役に就任し男爵辻前社長を監督に推選して茲に其の組織を更新し、以つて被保險者九萬有餘人を算するの盛況を致せり。

▲社長下鄉傳平は、江州長者の隨一人にして、去る明治三十七年、推されて貴族院議員となり、日露戰役に際する功に依り、勳四等旭日小綬章を賜はり、常に立法機關に參與して、農工商の代表者たるの抱負を實現したる國士なり。渠れの先代は奮鬪恭儉、以つて鉅富を積みたる積德慤直の長者として、關左關石に重きを爲した る一代の俊傑なりき。幼にして先代の董育指導を受けたりし渠れは、名門の出たる概あつて、實業界を濶步し、更に先代の遺業を發揮しつゝ、尙ほ新時代の趨勢を看て國家社會の進運に資し、公益更らに弘め、家格の尊嚴を遵守して、先代創業の殊功に寄するに守成の實功を以つてしたり。

▼渠は明治五年三月、江洲長濱町に生れ、第三高等學校を經て、慶應義塾に入り、

専ら理財學を修めて、經世濟民の識見を涵養し、更らに歐米に航して泰西の新文明に接觸し、能く採長補短、以て同化し、以つて混成す。歸來産業の奬勵發展に盡力するや、即ち長濱町長、滋賀縣輸出製糸組合長、大日本蠶糸會滋賀支會長を始め、長濱銀行頭取、長濱糸米取引所理事長、近江製糸株式會社長、京都電氣鐵道株式會社取締役、關西鐵道株式會社監査役、中の島製紙株式會社長として六面八臂の活動を爲したりき。而かも渠れは明治三十三年、歐米漫遊後、卒先して一身一業主義を唱道し如上各會社經營の任を辭し、專ら仁壽生命保險會社の經營に全力を盡し、遂に同社をして今日の盛況を呈せしむ。

▼渠の同社に於ける只だ徒らに重役の招牌たらず。固と同社の元老松平伯、辻男爵等の懇請に出づと、是れ渠が會社の利害を先にし、一時紛糾を傳へられたる同社をして、和平の裡に整理の實を擧げしめ、今や遽然として斯界の潛勢力たり。是れ畢竟渠の手腕の凡ならざるが爲めなり。

渠が先年二萬圓を基金として、下郷共濟會を設立し、以つて先代の遺志を繼ぎ、又た濟生會に一萬圓を寄附したるが如き、以つて渠が慈善公共の事業に厚きを窺ふべし。蓋し渠の如きは、眞に理想的繼嗣たりと謂つべし。

▼過般第一生命保險にマネージャーとして、敏腕の名を博したりし相良常雄氏また同社に入り現に大阪支店長として縱横の才幹を揮ひつゝあり。同社が近き將來に於て關西方面に一大飛躍を爲し、我が保險界に特筆すべき一新生面を開拓するに至るならん。仁壽生命の前途、豈に多望ならずとせんや。

殷盛を極むる

東海銀行

（菊池長四郎、吉田源次郎）

▼都下に大小幾百の銀行ありと雖も、特種銀行及び民營五大銀行を除かば、眞によく其の信を全うし、顧客に苟くも後顧の患なからしむるもの、果して幾何ぞある。

東海銀行

我が東海銀行の如きは、固と第一流の大銀行にあらざるも、其の取引の廣汎にして且つ顧客に多大の便宜を提供し、よく金融機關たる銀行業務の本分を沒却せざるは既に江湖の推稱する所、之れを其の實績に徵するも所謂一流の大銀行に比して、何んの遜色かあらんや。

▼抑も同行は去る明治二十二年の創立に係り、資本金三百萬圓、諸積立金は九十五萬五千圓の多きを算し、大正三年度下半期に於ける純益金は十七萬五千三百三十九圓七十六錢に達し、相當の好成績を收めたり。

▼同行は、初め本店を日本橋區堀江町の現支店所在地に設けたりしも、行運の發展は、遂に漸く狹隘を告げ、去る明治三十五年、七月現地に移り、更に明治四十二年に至り、歐米新建築の粹を萃めて、宏壯なる建築を落成し、以つて帝都の偉觀となれり。尙ほ同行は支店を日本橋、本郷、赤坂、本所、京橋、芝、淺草の各區に設け益々其の營業の區域を擴衍しつゝあり。

▼頭取菊池長次郎は都下一流の富豪にして、曩に東京府多額納稅議員たり。同行を始め、四十一銀行、東洋モスリン、富士製紙、東洋製粉、日本製麻、横濱倉庫等の各會社に重役を兼ね、夙に實業界の老輩を以つて許さる。而して其の家庭を淸和なること、富豪中稀れに觀る所にして、長孫絹子は嘗て泰宮殿下御學友として、高輪御殿に奉伺の光榮を擔ひつゝあれば、其の家風の奥床しさや、敢て喋々を要せず。同行が設立以來、順境に其の經營を持續し、幾たびか增資し、以て今日の盛況を見るに至りたるは、固と渠れの功として特筆せざるべからず。

▼菊池頭取に次で、同行の中樞人物たるは、夫の支配人吉田源次郎也。渠の職や則ち支配人なるも、其の行務を宰すること、恰かも重役格なり。渠の孜々として銀行業務を處理するや、計數的頭腦は、常に周匝の思慮を拂はずんば已まず。同行が市内に數箇の支店を增設し、又は貯蓄取扱を同始したるが如き、實に渠の發案施設に俟つものにして、他の一般支配人に比し、夐然其の色彩を異にせるを見るべし。

▼渠は栃木縣の人、鄉里にありし十八歳の時、既に栃木農工銀行の設立事務に當り中學校通學の餘暇を以て、定欵其他の重要書類を作製し、遂に其の創立を完了し、爾來約一ヶ年間、同行經營の任に當りしことあり。後ち壯圖大いに爲すあらんとし笈を負いて上京せるが、日幾何もなくして一片の意見書に、其の抱負と銀行經營の方針を叙述し、之を東海銀行頭取に寄せて採用を乞ふや、遂に時の頭取吉田幸作の驚嘆を買ひ、遂に聘せられて同行に入るや、一意專念事務に服したり。これ渠の銀行經營の資を養へる所以。

▼渠れの執務振りの勵精と、其の數理的才能とは、倏ちにして幾多の儕輩を凌ぎ、遂に拔擢せられて計算課長の任に就き、後ち本鄉支店長を經て支配人に進み、以て今日に至れり。方今惰弱以つて奏動せる青年輩は此の渠の行動に就て、學ぶ所あるべき也。

▼渠れの其の職に當るや、一に忍耐の二字を肝銘し、以て處世の秘訣となせり。故を以て渠れの銀行業務に於けるや、自己の天職として聊かも他を顧念せず、日々恪勤するを以て唯一の趣味となせり、渠が一支配人として同行に重きをなせる、豈故なしとせんや。而かも劇職の餘暇、明治大學を卒業し、法政經濟の腹笥大いに富む溫厚莊重の渠れに、加ふるに新進の智識を以つてす。其の財界は翱翔するや、必ずしも遠きにあらざるべし。

掃除屋の出藍を促す

田村正寛と嗣子順吉

▼主義に生き、事業に殉するは、男子としての快事たり。去歳、頽齡七十有七の老軀を提げて臺閣に宰相の印綬を帶びたる大隈隻脚伯の如きは、當に其の政治家たるの主義を實現せるもの、更に實業界の巨擘、澁澤、大倉、安田等が鑊鑠の頽齡尙ほよく壯者を凌ぎ、我が實業界に東奔西走殆んど寧日なきが如きは、眞に事業に沒頭するの一例たり。吾人は現下我が工業界の狀勢に稽へ、斯界の先達たる田村正寛氏

の出蘆せんことを庶幾して已まざる也。

▼去歳、海軍收賄事件に次いで、突發したる政界の危局は、轉だ風雲の暗澹たるを致したるも、大隈老伯の蹶起して內閣を組織するや、爲めに政界に一道の光明を認むるに至りたりき。今や田村正寛が山梨水明の地より出蘆して我が工業界に其の獨特の手腕を揮はんか、混沌たる斯界や、倏忽にして迷雲妖霧を一掃せんは必定なり。

▼渠は破綻會社の整理に頗る妙腕を有す。則ち工場掃除役の稱あるもの、畢竟渠れが稜々の氣、奇古の骨、絕妙の手腕あるに由らずんぼあらず。而かも先年、渠れが功成り名遂げて、舊都平安の地に燕居して、優游自適、世外に超越し、塵外に高臥し、翠微白雲に親しむ。而して只僅かに上毛モスリン其他一二會社に其の名を列するのみ。夫の上毛モスリンや比年內訌突發し、加ふるに經濟界變調の惡流に襲はれ紛々擾々たること久し矣。是れ吾人が同社の爲め、將た帝國工業界の爲め渠の出蘆を促がさんとする所以なり。

▼渠れは京都に隱退後、其の名、漸く我が實業界に忘られたるの觀あるも、渠は事業界の功勞者なり。即ち明治十九年、夙くも紡績業奬勵の急務なるを唱道し、卒先して大阪金巾製織會社を設立し、玆に專務取締役兼支配人たること十有二年、我が紡績事業の模範を示し、次いで浪花紡績、柴島紡績、大和紡績、都賀麻布紡績、日本絹糸紡績、攝州紡績、富士紡績、下野紡績等の諸會社に整理經營に任じ能く有終の美を濟したりき。就中去る明治三十二年富士紡績整理を時の社長富田鐵之助氏より託さるゝや。快力亂麻の概を示し、一夜の中に技師長以下二千數百名の社員職工等を解傭し、蟠屈錯雜せる情弊を芟除し、以つて社業大改革を斷行し、遂に整理を全うしたりき。其他攝州紡績の危急を拯ひて、鐘紡に合併せしめ、又東京製絨會社の不振を挽回したる等、狂瀾怒濤の間を縫ふて、萬里の長程を泳ぎ越し、而かも失敗蹉跌の痕跡を貽さゞりしは、眞に整理屋たるの稱呼を有するの偶然ならざるを

知。頃者渠の緣故深き上毛モスリンの不振を傳ふること頻々たり。是れ渠の奮勵一番して、危局を收拾すべき秋に際會せるものと謂ふ可し。抑々渠の人物は如何。

▼渠は明治の初年既に西歐文明に私淑して、夙に英書洋算の研究を爲し、明治三年七月、神戸に出で、稅關に職を奉じ、英語を修めたるも、一學究たるを得ず、明治八年內務省に勸業寮の設けらるゝや、選拔されて官費入學を許され、卒業後、滋賀縣に職を奉じ、農商課長として產業振興に資せり。時に年二十有六歲、偶々海外貿易に着眼したりし渠は、夫の棉糸金巾等の輸入額の多大なるを見、之れが輸入防遏の爲め、奮然官を辭し、遽に紡績界に下りて滿身の心血を傾注し、後年歐米歷訪の途に上り、親しく彼地の紡績狀態をも視察し、歸來畢生の事業として斯界に努力したりき。

▼渠の民間實業家として奔馳せるや、意常に社會公益を先にして一身一家を顧みず而かも德孤ならず必ずや隣あり。滋賀縣米穀改良組合、大日本紡績聯合會を始め幾多の會社團體は渠の功勞に酬ゆる爲め感謝狀紀念金品等を贈呈せしこと幾何なるやを知らず。渠れが斯界に於ける功勞、誰れか之れを稱せざらんや。

▼渠嘗て神童の名あり。十二三歲の頃蘭學英學の研究者として先覺たる實を示し十四五歲の交拔擢されて藩黌の助敎授に進みたりき。其の新文明輸入の先驅として、藩主の許可を得ず。卒先斬髮して嚴君の激怒を招き、一小室に幽閉せられたりし一事、また渠れが先覺の明ありしことを窺知すべし。吾人は風塵を洛外に避けたる渠を想起して、我が工業家の現狀を思ふ時、轉た渠れの手腕を翹望せずんばあらず。

▼嗣子順吉氏は、明治二十七年大阪高等商業學校を出でたる俊才にして、嘗て長濱海產物會社、絹糸紡績、鐘ケ淵紡績等の諸會社に敏腕を揮ひて學理を實務に活用し、乃父の人物と併せ稱せらる。後ち上毛モスリンの主事として聘せられ、今や大小の社務一切を處理して、同社經營の一砥柱たり。

▼風貌一見貴公子の如く、態度寬宏にして頗る慇懃を極む。而かも眞摯着實、事に

當りて精勵なるは、乃父正寛氏の面目を躍々如たらしむ。渠れによりて田村家の榮福を進むるもの、それ幾何ぞや。積善の家に餘慶ありと此の故人の一語、洵に吾人を欺かざるを想ふ。

怪物

松谷天一坊の正體

▼財界に於ける梟雄、輸贏市場に於ける怪物、斯く言はんよりも、寧ろ相場界の天一と呼び做さんこそ、分り好かれ。實に渠れは、投機界の天下に、隨一人の快擧を企て、乾坤天地、唯だ一擲に了して、洒々落々、若し夫れ渠れの生涯より、相場の二字を拉し去らんか、究竟する所、一個の松谷元三郎の形骸のみ。

▼渠れは、斯くの如くにして、其の渾名の天一坊を天下に藉甚するに至りたり。今にして渠れの半生を見れば、頗る多趣多樣　山あり谿あり、峰あり淵あり、怪巖怪石、縱横に布置す。如今渠れの動靜、餘りに落莫に過ぐと雖も、未だ渠れの生命銷磨せず。雌伏多日、一たび怒號するの日は、財界の風雲、頓みに競起して、再び疇昔の風丰を見るに至らん。現下の財界環視の焦燒たる內國通運事件の如き、また渠の面目躍如たるを見る。

▼渠れは、泉州堺市の一富豪、酢屋と云へる一米問屋に生る。家は元と三十三萬石御三家の一たる紀州家の用達を務めし由緒ある家柄なりき。富巨萬を積める家も、渠れが三歲の時、俄然破綻の運命に遭ひて、一家離散の厄に會しぬ。

▼松谷の姓を冒したるは其の後なり。即ち九歲の時、大阪に轉住し、株式の成功者加賀市太郎に丁稚となる。十七歲の時、大阪堂島仲買人荒木英一に雇はれ、天賦の資、乾坤一擲の快擧を好むや、私かに阿睹物を投じて、投機を試み、一攫千金ならずと雖も、其の輸贏の興、將に熟せんとするや、倏ち勝敗顚倒して、囊中無一物となる。斯くの如くにして、渠れは諸處を流浪したる末、再び新たに堂島の一角に現はれたり。

▼當時堂島の仲買人は、渠れを遇すること極めて冷淡、唯だ曰はく『此の横着小僧如』と到る所渠れは冷嘗と冷嘲とを獲て、宛も喪家の犬の如く、猾々來として漂泊したりしが、一片の俠骨、後藤義三郎の爲めに救はれ、入つて店員と做る。當時『北平』の大買占に對抗して、賣方の爲めに斡旋し、奏功漸く斯界の認むる所となるや驚嘆して曰はく『後世恐る可し』と。渠れの得意や、想ふ可し。

▼彼れ時に年歳二十歳に達せず、而して既に五十萬圓を獲たり。其の辛疎機敏の手腕、鬼神にあらずんば能はずと評されしもの、蓋し偶然にあらず。當時大阪の輸贏界に、大王の稱ありし磯野小右門、渠れの秀雋なる才幹と、膽斗の如きを看て曰はく『是れぞ天下一品なる』と。渠れは斯くの如くにして天一坊の名を博せり。

▼渠れは才奇にして、而して骨亦た奇なり。明治三十二年、岡山西郷の稱ある杉山岩三郎を聘して劃策大に盡し、大阪堂島株の一手買收を試むべく、傲然天下に呼號せり。僅に一閲月にして五千の總株中、實に四千七百株を獨占したり。而して三月上旬には早くも取引所を思ふが儘に改造して、渠れは事實上の主權者たるに至れり。渠れは斯くの如く天下に獅子吼して飽くまで腦裏に一個の黄金時代を夢みたりき。

▼然れども渠れの夢寐は束の間にして覺えぬ。渠れと越井石倉の三角同盟成るや、米穀の買占を企劃して、同年八月限り迄に四十四萬石の正米を買收したりしが、時偶々大阪全市の銀行業者は、其の金融を拒みたるを以つて、遂に一進一退の如何とも做すべからざるに會し、自暴自棄の極、渠れは七十二萬右を背負つて仆れたり、當時財界の混亂、其の極に達し、恐慌復た恐慌し之れが爲めに其の訂盟者の一人石倉某は遂に發狂するに至り、渠れは漸く安田善次郎より五十萬圓の融通を待て、一時を糊塗したり。

▼沒落の後ち、展れは東京の蠣殼町に現はれたり。礒野に依りて獲たる天下一の名は、東都に於いて初めし『天一坊』と變じたりしも、渠れは寧ろ大に之を喜びて、知

已友人と共に祝杯を擧げたりき。渠れの膽、北斗を蔽ふの豪快は、此の一事を以つて見るも明かなり。

▼渠れの豪宕にして倨傲なるは、先天の性也。盛名一時に煥發したりしこと、唯だ僅に瞬時に過ぎざりしと雖も、渠れは未だ小康を以つて安んぜず。更に百尺竿頭、一歩を進めて回天的抱負の實現を夢みたりき。然れども渠れは、餘りに其の成功を急ぎたりき。而して稍々空想の分子、餘りに多きに過ぎたり。是れ却つて蹉跌の歴史多き所以たらずんばあらず。

▼渠れに在りては事業は生命なり。其の途を右にするも、左にするとを撰ばず、猪突豬勇、敢て勇往邁進せずんば已まず。而して渠れは何等の蹉跌なきを以つて、餘りに無聊をなしたりき。故に新聞雜誌記者等の來つて渠れを訪ふあらんか、故意に裸體にして應接し、或は唔袍を纏ふて面唔するなど、傍若無人を極む。記者怒つて渠れの缺點を發き、紙上に渠れを解剖し來るの時、渠れは私かに北叟笑みを洩らして、冷然之れを讀過したりき。而して渠れは曰く『予に何の惡事かあらん。貶すも好し、稱すも亦た妨げず。而も天一坊の名を藉甚するや、則ち一なり』と、豈快ならずや。

▼渠れは年齒四十歳、未だ壯忼の氣銷せず。彼の仁壽生命と云ひ、日本倉庫と云ひ八甲山事件と云ひ、平沼變死事件と云ひ、松辰事件と云ひまた現下財界の視線を萃めたる内國通運事件と云ひ、悉く辛辣的行藏の歴史を繰返したりき。

▼渠れは確に財界に於ける一種の奇才なり。性奇なれば、才又た奇に、人又た奇に骨又た奇なり。渠れは揚言して曰はく『乾坤一擲の快擧は予の生命なり』と。而して其の事に當り蹉跌せんか、一事件常に十萬圓以上を超過すと、而かも猶ほ平然として壯忼の意氣、牢乎として拔くべからざるものあるは、驚くに堪えたり。渠れは確かに財界の彗星にして、恐るべき未知數たらずんばあらず。

製糖界の新進

臺東製糖の前途

（安場末喜）

▼先年、臺灣總督府に於て、外糖驅逐の糖業政策を採るや、當時府の保護を得て設立せられたる製糖會社は、偖指するに遑あらざるの觀あり。後ち糖業政策變更を見るに至りて、保護遂に止み、之れに加ふるに財界の不況、甘蔗の凶作等、相次で起るや、幾多の會社は悉く其の經營に困しみ、先輩の大會社すら、漸く前年の積立金によりて、辛くも經營を持續し、徐ろに時機の到來を待ちつゝありき。而かも大正二年二月、糖界に雄飛すべく設立せられたる夫の臺東製糖株式會社が、進んで臺灣の富源を開拓すべく、施設經營に力を盡しつゝあるは、我が事業界の爲めに大いに多とせずんばあらず。

▲同社は、資本金三百五十萬圓にして、本社を臺灣臺東廳卑南に設け、工場を卑南馬壠及び新開園に設け、尙ほ出張所を東京市に設置し、着々社業の進展を圖りつゝあり。其の營業の種類は、砂糖の製造販賣を第一とし、尙ほ甘蔗の栽培及び販賣蔗園の開墾、纖維事業、林業、鑛業、棉花栽培、製紙、製腦、電氣事業、會社專用の鐵道竝に船舶に依る運輸業、殖民事業、酒精製蒸及製氷等と做せり。而して臺灣の振興策として甘蔗栽培事業を益々盛大ならしめんとし、先づ蔗園開墾に力め、同社の開通せる溝渠によりて其の利便に浴するものをして、專ら甘蔗を栽培せしめんとせるは、まだ機宜を得たる方策たらずんばあらず。

▼同社が遠大の抱負を以つて、臺灣開發の任に當れるは、また國家的觀念の厚きに由らずんばあらず。而して同社重役大株主等が、何れも當代の名門富豪たるは、同社の將來に福祉すること、多大なるものあり。現に重役たるものには、取締役社長男爵安場末喜、常務取締役堀兼三郎、海野景彰、取締役男爵野田龜喜、男爵坪井九八郎、吉野周太郎、矢島榮助、渡邊勝三郎、若尾璋八、監査役内池三十郎、松原

金重、渡邊六郎、上田省三、若尾謹之助等を何れも財界の一勢力たるもの、以つて同社の基礎鞏固にして、營業範圍の擴大と營業方針の着實を稱せらるゝに至りたる蓋し當然の事に屬す。

▼社長男爵安場末喜は、熊本縣士族下津休也の五男、出でて安場家に入り、故保和を襲ふ。岳父保和は、明治二年以來、膽澤大參事、福島縣令、愛知縣令、元老院議官を經て知事に任せられ、福岡、愛知、山形、高知、宮城の諸縣に良二千石の令名を博し、更に北海道長官として壯海開拓の殊功を收めたりき。而して渠れが安場家に入り、岳父の後を承けて同族間に推重せらるゝもの、固と岳父の聲望、凡を拔くものあらんも、復た渠の英氣才識の群を壓するに由らずんばあらず。

▼即ち渠れは、始め慶應義塾に學んで、夙に產業の振興に力を注ぎ、卒先製紙業の有望なるを提唱し、自ら之れが研究の爲めに米國に留學せり。渠が業成りて皈朝するや、直ちに印刷局技師に任せられ、尋で東肥製紙株式會社技師長に聘せられ、又臺灣總督府製紙事業取調事務を囑託せられ　幾度か清國に渡航したりしが、此の事以つて渠が先見の明と精力の絕倫なるとを知悉するに足らずや。先年貴族院議員に互選せられ、今や臺東製糖に長として、絕倫の才能を揮ふ。彼の徒らに飽食暖衣、唯だ父祖の遺功に賴りて、蠢々焉たる華冑紈袴の子弟に比ぶれば、渠れの如きは、蓋し一異彩たらずんばあらず。

▼社長として華冑界の偉材、安場男爵を戴ける同社は、尙ほ常務取締役として堀口兼三郎、海野景彰あり。實に兩者は、同社經營に資すること、其の幾何なるを知らず。これ堀口常務は大株主たる甲斐の富豪若尾家を代表して臺灣の本社に常任し、海野常務は同社大株主たる福島縣屈指の豪族吉野家を代表して東京支社に常任し、相呼應じて社業に盡瘁しつゝあり。同社が近く糖界の活躍期に入りて一大飛躍を爲し臺灣事業界に一旗幟を樹てんこと、敢て遠きにあらざるべし。

奮鬪の權化

阿部吾市と茨城採炭

▼如今、實業家にして富豪と稱するもの、素より僂指するに遑あらずと雖も、堅忍不拔、刻苦精勵、錙銖涓滴の微を集めて其の產を積み、延いて社會の公益に資し、並びに一身一家の榮福を全うせるものは罕れなり。唯だ夫の炭界の巨人阿部吾市氏に至つては、正に此種の典型として推稱するも、敢て過褒にあらざるべし。

▼阿部は一代の富豪なる澁澤榮一男、淺野總一郎等の後援を有すと雖も、咸なれ渠れが奮鬪の生涯に依りて贏ち得たる必然的信用に過ぎず。乞ふ吾人をして、姑らく渠の前半生を語らしめよ。

▼渠は岐阜縣稻葉郡の產、幼にして慈母を喪ひ、十一歳の時、嚴君に伴はれて東都に出で、孤苦零丁の苦楚を嘗めたり。即ち炎暑燬くが如き、夏日氷水の行商に小幼の躰軀を痛め、朔風凜烈、膚を劈くの寒夜、稻荷鮨を鬻ぎ、更に酒肆、小間物店、

簞笥店、質店等に雇人の身となり、時に芝區白金最上寺の小坊主となりたることすらありき。若し夫れ社會は實際的の大學校なりとせば、渠れが如く苦艱辛難を嘗めたる者は既に金看板の卒業生たるに値ひすべし。渠が何等學歷の見るべきなくして能く澁澤、淺野等の知遇後援を受け、實業界に翱翔するに至りたるは、決して偶然の僥倖にあらず。

▼渠れが始めて淺野總一郎に知らるに至りたる動機は、好箇の傳奇的小說に類せり偶々別後沓として消息無かりし實父が淺野方の回漕部に在れるを、時の新聞紙上に於て知るや、生別八閱年の渠れは、踴躍一番して乃父を訪ひ、親子八年振り對面の場の一齣を演じたるは、確かに一場の連鎖劇なりし。斯くして渠は嚴君の意に從ひ、共に淺野氏に雇はれ、後ち石炭部に轉じて遂に主任の地位に進み、能く主家事業の發展擴張を圖り、明治三十年九月、獨立して瓦斯コークスの販賣に從ひ、後ち茨城採炭株式會社を設立し、遂に之れが經營の任に當るに至れり。

▼茨城採炭は、資本金七十五萬を以て明治三十四年九月に設立せられたるものにして茨城縣下屈指の炭礦を經營し、其の出炭量の多きと良質を以て稱せられ、茨城縣下中郷村に鑛業所及び支店を設け、府下南千住竝に地方橋塲に出張所を設置し、其の販路の擴張を告げ、社運逐日盛況を呈し、現に積立金十二萬圓以上を有し、後期繰越金四萬圓餘を計上するに至れり。同社の今日ある、蓋し阿部社長の献身的經營の功に由らざるはなし。

▼渠れが少幼、出でて實物教訓によりて其の修養に資したりしことは云ふ迄もなし就中奉公時代に於てすら、劇務の餘暇、讀書習字を修めて、夙夜自ら啓發修養を積みたりし一事は、以つて渠の立志的行逕の凡ならざるを知るべし。且つ寸時と雖も閑居せず、東奔西走して其の業務に精勵したるは、當代青年をして當に愧死せしむべきものあり。渠れの成功たる、誰が是れを天祐と爲すものぞ。

▼奮鬪的事業家たる渠の一面は、滿身事業の企策經營にあるも、尙ほ且つ公共心に敦きを以つて見れば渠の偉大崇高の人格を想はしめずんばあらず。先年回漕業を營みし時、帆船成功丸(二千石積)を購ひたるも、適々同船が灘破の厄に逢ひ、三千圓の保險金を得るや、渠は其の保險金金額を二百五十年の長期預金となし、滿期後元利十二億八百四十一萬七百七十九圓となれるとき、之を國防費、古社寺保存費、學校費本金及び公共事業費に充て、其の殘額の一部を割きて阿部家世襲財産に充つるの計畫を立てたり。是れ渠が深遠なる謀圖の群を拔ける一端を窺知し得べし。今や東京瓦斯コークスを始め、日本染絨、其の他數會社の重役に推されたるが、最近更に仲萬次郎、中濱慶三郎、細谷安太郎、鈴木太郎の諸氏と共に東京煉炭株式會社を設立し、渠れは此に社長となり、益々六面八臂的活動を試みつゝあり、豈に旺んならずや。

北海の重鎭　吉田三郎右衛門

▼先年日露の國交破れ、陸には幾十萬の貔貅北滿の異域に死生を賭し、海には幾十の艨艟、舳艫相銜み、帝國の興廢此の一擧にありとして、各々其の任務に就くや、國民の志氣爲めに緊張し。朝野は熾んに後援の實を擧げんとして已まざりき。此の秋に方りて卒先五萬金を軍資金として献納し、一片報國の至忠を表明して、名聲を世に風靡せしめたるものありき。これ則ち北海道の素封家吉田三郎右衛門氏にあらずして誰ぞ。

▼渠れは北海の富源開發に殊功ありたる福山町吉田家の當主にして、能く先代の遺業を承ぎ、益々家業を盛大たらしめたるもの也。渠れは北海唯一の特產事業たる漁業界の起ちて、一方に雄視せらるゝのみならず、去る明治三十五年以來、支店を東京市に設けて、專ら北海物產の販路を擴張したると、或は留萌炭礦會社の取締役として同社經營の要衝に當りたるは、世人の知る所なり。

▼渠れは先代三郎兵衛門氏の嫡男に生れ、幼にして讀書を好み、聖賢を景慕するの念熾んなり。鄉黨相傳へて、士君子と倣せるも、宜なりとすべし。而かも乃父病を以て黃泉の客となり。幽明所を異にするや、能く孝道の大義を盡し、先代の遺業を承けて毫も衒誇、虛榮の態度なし。資性最も同情心に富み、身を持すること、頗る謹嚴質素にして、國利民福の增進に力む。即ち渠れが明治二十七八年の交、日清戰役當時は、夫の日露戰役當時の如く、巨額の軍資金竝に恤兵の金品を献納して、軍國の急に應じたりしが、後ち政府より其功を以つて、特に從五位に叙せられたるが如き、以て斯の奉公博愛の至情を知るべし。

▼嗣子成之氏は、また天資俊邁にして濶達、最も社交に長ず。曾て學を慶應義塾に修め、業成るや、齡め而立に達せずして巴貿易商會を設立し、以つて輸出入の業に從ひ、更に日本製炭、國民銀行、日本建築用紙、東洋火災保險等の重役又は社長として活氣充滿せる快腕を發揮したりき。而も年少各氣に驅られ、時に蹉跌を招くも素とこれ經驗の乏しきに出づるが爲めにして、深く咎むるに足らざるべしと雖も、

吾人は渠の爲めに之を惜しみ、同時に將來の圓熟渾融を待つや頗る切なり。最近の東洋火災保險の如きも渠れの爲めには好般鑑とすべし。渠れが嚴君と相俱に、我が實業界に優勝の地歩をしめつゝ各方面に幹旋努力せんか。敢て吾人の囑望を空しうせざるべし。

▼果然今次の總選擧に方り、嚴君三郎右衞門氏が函館郡部の有志より推薦されて、逐鹿場裡の人となるや、福山、龜田、後志方面の有力者相率ゐて渠れの人格法望を景仰し、以つて切に其當選を期し、相呼應して今や必勝の勝算歴々たりと。德孤ならず、必ずや隣有りと。實に此の語は渠を形容して餘す所なりけん。

名實兼備の　帝國生命保險の實力

（福　原　有　信）

▼保險契約高一億一千五百萬圓の巨額を號し、總積立金一千六百萬圓餘を擁して、我が生命保險界のオーソリチーたる帝國生命保險株式會社は、大正二年度の決算に於いて、年一割六分の配當を爲し、又臨時配當として十割の利益配當を爲して、爲めに斯界の耳目を聳動せしめたり。

▼惟ふに同社は、明治生命保險に次げる古參會社にして、實に明治二十一年五月、資本金一百萬圓を以て設立せられたり。而して創業以來、我が保險界に一道の光明を投下して、同業會社に其の範を垂れ、社會公益に資補したること尠少ならず、尚ほ逐年營業範圍を擴張し、現に大阪、仙臺、函館、金澤、福岡、名古屋の各所に支店を設置し、尚ほ全國樞要の地に七ケ所の出張所、八百有餘の代理店を設けて、遠く朝鮮、臺灣、支那、南洋の各地に向け、業務の發展を圖りつゝあるは、益々同社の偉大なるを語れるものと謂ふべし。同社が先進たる明治生命保險を凌駕し、先んじて一億圓以上の契約高を表示したりし事實は、これ同社が保險界に覇者たるの概を示せるものと謂はざるべからず。茲に於いてか、世を擧つて其社長福原有信氏の

經營的手腕を稱せざるは莫し。

▼社長福原有信は、保險界の先達たるのみならず、尙ほ我が藥業界の先覺者たり。夫の銀座街頭に文明式店舗の模範を示し、藥業以外更に歐米小間物化粧品を商ひ、內外人の信用を萃めつゝある資生堂は、實に渠の主宰經營に係るもの、また渠の一面を彩りつゝあり。而かも一搏して不正輸入商人の跋扈を懲らし、我が商人の氣魄と矜式とを高きに維持せしめたるは、益々斯業者間に推稱せらるゝ所以たらずんばあらず。

▼渠は、千葉縣安房國松岡村の人、嚴君は市佐衛門と云ひ、世々刀圭家を以て聞ゆ渠れ又た家業に從はんとして、夙に東都に出で、織田研齋翁に就きて醫學を修め、後ち轉じて幕府の醫學所に入り、研鑽大いに力め、業成るや、明治二年醫學校中司藥に任ぜられ、明治四年、十二等出仕として海軍省に入り、專ら衛生藥劑の任務に從ひ又海軍病院藥局長として令名を博しぬ。

▼由來國家的觀念に富める渠れは、幾多同胞の病魔を治せんとし、官を辭して藥舗を開き、以つて衛生の普及に盡瘁し、太く社會の同情と信賴を博し、幾何もなくして富鉅萬を累ぬるや、更に國力の發展に努むべく、幾多の銀行會社の設立に從ひ、就中大日本製藥、帝國生命保險、小田原電鐵、博多灣鐵道、關東酸曹等の各會社に重役として大いに經營に劃策したり。

▼如今資生堂の名が、山村水郭に著聞せられ、其の發賣に係る製劑、化粧品等が、到る所に好評を博しつゝあるは、畢竟渠が斯業に於ける貢獻の多大なるを窺はしむ曩に渠が身を衞生界に起し、明治十三年藥劑師試驗に合格し、明治十五年東京藥劑師會を設け、又獨力を以て東京製藥所を設け、序次實業界に羽翼を張るや、頓に聲望を博して今や東京商業會議所議員其他の名譽職に推され、以つて大いに名聲を喧傳せらる。これ渠れ卓識達觀に因るも、又一因としては居常虛飾を忌み排華就

實の方寸を定めて毫も衒耀の態なきに基ゐせずや、聞く渠の店員にして藥劑師たるもの、既に十數人の多きに出づと。這箇の事實は少なるが如しと雖も、渠が國家の衛生事業に貢献せる功績の一端として呼稱するに足るものあり。

波瀾重疊の勝利者　川北德三郎

▼歐洲の戰局は愈〻展開し、亞いで日獨の國交破るゝや、戰雲漠々として洋の東面を蔽ひ、如今輸贏市場の風雲、轉た暗澹たらんとするに際し、還た當年の成金を夢むもの多く、市場漸く混亂の狀態を現ぜんとす。而も此の千古未曾有の變態市場に在りて、幾千萬の大玉を處理し、以つて財界の調節機關たるの責務を全うし得るもの、果して幾人かある。夫の投機界の禪子川北德三郎の如きは、正に其の人たらずんばあらず。

▼渠は明治三十七年、米穀仲買人より轉じて株式仲買人となり、爾來幾多の財界混沌期に際會せるも、未だ曾て蹉跌せず。序次進境を劃して今日の大を致し、今や一擧手一投足は、悉く市場に環視の標的となれり。渠が「目先きの利く人」として斯界に推重せらるものは、固と渠が商機に敏なるに由るべしと雖も、確かに膽斗の如き豪快の資のなからずんばあらず。

▼渠れ例令、身を投機界に列するも、一攫萬金的の成金者流にあらず。粒々辛苦涓滴積水の力を盡したるもの從つて春宵千金の驕奢傲遊を爲さず。生平文明的商道に準據し、其の營業方針も隨つて堅實漸進を以つてせり。比年『北商店』の名聲頓に斯界に揚がり、先年衆望を擔いて東京株式仲買委員に當選せり。これ渠の人格信用の一班を窺ふべし。而して渠の前半生は如何。

▼渠は明治の初年、夙くも海外通商を唱道し卒先自ら英京倫敦に赴き、彼我の雜貨貿易に從ひたりし一代の快男子川北喜助の嫡男也。乃父既に此の概あり。其の血

脈を承けたりし渠れの爭でか常鱗凡介を以て安んずべけんや。

▼乃父喜助が海外貿易に奇利を博すや、更に海運業に從ひ、覇を岩崎彌太郎と爭ひ矢玉盡き、刀折れて、勝を岩崎に制せらるゝや、捲土重來の勇を鼓して米界市場に現はれ、乾坤一擲の壯擧を試みたるも、遂に運命の神は、無慘にも年れを飜弄して一敗地に塗れしめぬ。乃父失敗の後を承けたる嗣子德三郎氏の困憊や、蓋し推知するに餘りあり。

▼乃父失敗によりて、孤苦零丁の艱苦を嘗めたる渠れの少年時代は、轉た人をして測隱同情の感に堪えざらしむ。即ち十二三歳の頃、渠はお國名物の竹皮細工を商ひて京阪地方に來往し、或は旅館の帳附、玉轉がしの見張番を爲したりしことありき。而かも渠れや乃父の血脈を受けたるもの、豈に平々凡々として、一身を巷閭の裡に流離するものならんや。果然渠は出でゝ螭殼町の一仲買店に雇はるや、刻苦精勵、能く主家の利を圖り、自ら又涓滴の資を蓄へ、懷中常に幾何金を擁して放たず酒色放逸これ事とせる斯界に在りて、人々を驚異せしめしこと幾回なるを知らず。天は果して自から助くる者を助けぬ。渠が仲買店に雇はるる事十閲年、明治三十五年に至り、獨立して米穀仲買店となり、茲に初めて大河の決するが如く奔然として馳突し、遂に信用は翕然として起り、一躍して第一流の仲買人と伍列せり。而かも小成に安んぜざる渠は、更に前途の大成を期して株式界に轉じ、以つて今日の盛況を呈するに至れり。

▼渠れは、既に斯界の雄者也。市場の珍物也。傳ふべきもの固より多々あるも、就中渠が禪味に透徹して精神修養に重きを置けるは、確に營利に汲々たる市場の一珍とすべし。

起死回生の實を示せる

日糖の經過を叙述す

（藤山雷太、高山長幸、伊澤良立）

▼曾て沈々たりし財界の靜謐を破りて、紅蓮の火は揚り、炎々として、更に政界の一角に飛火し、當年の名士横井時雄以下數名の代議士が瀆職の罪下に失脚したる日糖事件は、恰も現下の大阪北濱銀行が破綻の悲運に依りて、當時の頭取岩下清周以下同醜が、累々として拘禁せられたるにも似たらずや。當時日糖に社長たりし農學博士酒匂常明は、之れが爲め遂に非業の最期を遂げ、秋山、磯村の諸重役、相續いて囹圄の人となるや、該社の運命の危急なること、宛ら風前の燈火に等しき觀あり て、財界の恐慌を惹起したること、また今日北濱銀行が關西財界に恐慌を招致したると略ぼ相似たるが如し。

▼當時日糖の紊亂や、其の極に達し、到謀收拾すべくもあらざりき。此に於てか、財界の名士、債權者等胥謀りて、男爵澁澤榮一氏に囑して、整理的手腕を有する後繼者を需む、澁澤男は實業界の耆宿、而して天下の伯樂たり、彬々たる俊才、渠の門に蝟集して、男の命を是れ俟つもの多し。偶々藤山雷太、多士濟々たる門下より男の爲めに擢ぜられて、同社整理の重任に就けり。渠は實によく此の危局に處して整理發展の功を奏し、遂に有終の美を告ぐるや、次いで社長に推さる。渠の其の整理手段や如何。

▼始め渠れの日糖整理に從ふや、同社の缺損は、實に千四百餘萬圓に上り之に加ふるに大藏省に滯納稅額金四百萬圓と註せらる。玆に於てか、渠れは、先づ東京に債權者聯合協議會を開き、或は哀願的に、懇願的に、或は懇請的にあらゆる手段を盡して、十箇年賦償還の議を立て、其の同意を得るや、一面又た大藏省に滯納稅の年賦納付を請ひて、其の允許を受け、初めて玆に事業を開始し、更に株主に對して新株金の拂込を爲さしめ、奮起一番、新工場を臺灣に建設し以つて一旦倒產に瀕したる同社を復活せしめ、明治四十四年下半期に至りては、一躍八十萬圓の純利益を得て、五朱の配當を爲すに至れり。斯くして渠は三萬有餘の株主に懇請せられて社長に就任し能くその輿望の重任を全うしたりき。是れ我が事業界に於ける有益なる活

教訓たるに値ひせずや。

▼渠の社長としての整理は着々として進み、既に大正三年度下半期に至りては、一千餘萬圓の利益を計上し、之を以て負債の整理償還に充て、積立金を増す外六十二萬圓の後期繰越を爲したり。而して整理經營の方針たる、頗る機宜を制して遺すなかりき。則ち東京及び大阪工場を擔保とせる日本興業銀行の信託社債三百萬圓は四ケ年間に年々七十五萬圓宛を償還し、既に昨年十月を以て完濟し、大里工場の買收費の借入金六百五十萬圓も毎年三十二萬五千圓宛支拂ひ、現に百九十五萬を餘せるのみ。又一般債權者よりの借入れたる四百萬圓も、其の大半を償還し、其の殘額は近く社債に振替ふるといふに至りては、同社の債務たる僅かに四百五十八萬圓を計上するのみ。而して向後四ケ年半を經過せんか、優に此の債務四百五十八萬圓を完濟し、茲に東京、臺灣、大里、大阪、名古屋に有力なる大工場を有し、運轉資金千二百萬圓を擁する斯界の一大動力たるに至らん。世上藤山氏を稱して財界の耆婆扁鵲なりと推稱するもの、また故あるかな。

▼今や財界の變態期に入り、事業界の時事日に非ならんとす。而かも日糖會社が截然好良の成績を擧げたるは、これ糖界の商況に活氣を呈したるに基くと雖も、また藤山社長以下の拮据經營の功を沒すべきにあらず。

▼社長藤山氏は佐賀縣の人、長崎師範學校を出で、更に進みて慶應義塾に入りて其の業を了ふ、後ち新聞記者、縣會議員、縣會議長、三井銀行抵當課長となり、或は芝浦製作所、王子製紙株式會社、東京市街鐵道、泰東同文局、日本火災保險株式會社等に入りて才幹を發揮したることあり。今尚ほ東京商業會議所副會頭を始め公職並に重役を兼ねて令名嘖々たり。これ海洋の度量に、加ふるに明快風生の手腕あるに由る。奚んぞ渠の如きものなくんば、誰れか此の危急を救ひ得るものぞ。

▼藤山社長に次いで、同社經營の任にある常務取締役高山長幸氏亦先年藤山氏と共に日糖整理の任に當りたる功勞者たり。曾て慶應義塾を了へ、中學校教諭たりし

ことあり。後ち三井銀行に入りて敏腕を揮ひ。政界にありては、郷里愛媛縣郡部より選出せられて代議士たること數回、其他帝國運輸自動車、蓬萊生命保險、明治石油會社等の設立に盡力し、其の重役として經營に力めたりしことあり、夙に愛媛縣出身の名士として著聞せらる。

▼更に常務取締役伊澤良立氏を見んか、また同社の砥柱たるを失はず、渠は京都の人、京都中學校を經て慶應義塾に學び、業成るや三井銀行、三井物産、住友銀行等に其の才幹を揮ひ、明治四十二年、藤山、高山氏と共に紊亂其の極に達せる日糖に入り、拮据經營、遂に今日あらしめたるの人也。要するに大日本製糖が復活して、今日の盛況を致したるは、常任監査役指田義雄氏を始め重役以下社員の協力一致の功に俟つもの多かりしも、特に以上三氏の殊功を認めずんばあらず。

異彩を放てる

東京農銀と中山頭取

▼日生將軍、故星亭の東京市政に臨むや、毀譽紛々として其身邊に蝟集し渠の眞骨頭を穿つものなかりき。而かも兇刃に殪れ公人的生涯の最後を彩るや、擧世渠の剛毅果斷、又能く部下に厚く東京市發展の根蔕を鞏めたりし偉績を稱せざるはなかりき、區々たる生前の毀誹何ぞ意に介するに足らん、男兒須らく棺を蓋うて後ち已むの概なくんばあらず。

▼東京府農工銀行頭取中山佐市氏は夫れ往年の日生將軍に髣髴せずや、實業家たる渠を政治家たりし星亭に相較比する、素より其の倫に非ざるも、紛々たる毀譽褒貶を一身に萃めつゝあるも意に介せず、斷乎として其の志す所を敢爲して憚らず、着着として財界に優越の地歩を築き、一面東京府農工銀行を主宰し、夫の經營方法の摯實たるべき農工銀行の營業振を活躍せしめ、陸離たる光彩を放たしめつゝあるが

如き、往年故星亭の東京市政に於ける奮闘振りと相似たらずや、坊間渠を稱して財界の星亭と比稱する、また故なきにあらず。

▼千葉縣長生郡の產、鄕地千葉中學校を卒業するや直ちに帝都に出で、先輩成川尙廣氏を訪ね、乞ふて知遇を得今の中央大學の前身英吉利法律學校に入りて英法科を修め其の業を了ふ。而かも在學中資を鄕里に仰がず、初め成川氏に會ふも何等一面の識なく且つや又一片の紹介狀すらなきも懇請して自ら食客たるの希望を達したりき。此の一事、以て渠の剛腹堅志の凡ならざるを見るべきにあらずや。渠の今日あるを寔に所以あるかな。

▼渠は英吉利法律學校(中央大學の前身)を卒ふるや大藏省に職を奉じつゝ現社會に喰喎したり。而かも精勵して怠らず、日本銀行及び國立銀行の紙幣合同償却案を起草し、後ち鐵道局に轉じ鐵道法規及び銀行諸條例改正案を起草し、常に最善の努力を傾注したりしを以て博士田尻稻次郎氏に信任せられ、東京府農工銀行の設立せらるるや、特に田尻博士の推薦を以て支配人となれり。是に於て渠の運命も展開せられ、遂に今日の大を致したり。渠が當代の高材田尻博士に信を繫ぐ所以のもの、其の創業的才幹を有し、且つ盤根錯節に處して機運に乘ずるの才氣あるに因らざるはなし。

▼東京府農工銀行が僅に三十萬圓を以て設立せられ、碁年ならずして增資し現に二百萬圓の資本金となし、且つ曩者東京府廳内の一室に間借的營業を爲せしも、今や日比谷原頭に牢乎たる石造の洋館を構築し、行運をして益々隆益たらしむるもの、咸な渠の奮闘的營業の賜たらずんばあらず。

▼由來農工銀行は農工業の發展奬勵に資すべく、主として擔保貸附を營むにあるを以て其の經營の難き、世人の認むる所にして近く之を各府縣農工銀行の成績不良なるに徵すべし。獨り渠が經營の任に當れる同行のみが異數の發展を遂げ、着々好成績を示しつゝあるは、是れ其の貸附方法と債權取立の方法相並びて其の機宜を得た

るに職とし由らざるはなし、先年支配人を經て現に推選せられて頭取の任に就き、同行の運命を一身に負荷せる如き、是れ渠の同行に於ける功勳の偉大なるを語るものにあらざるなきを得んや。

▼先年、某雜誌紙上極力渠の人格行動に就て爬羅剔決し、以て完膚なからしめんとせるも、世上之を以て些かも渠を累せず、尙財界の星亨と做し紛々たる毀譽褒貶を一身に圍繞せしむるに至れるや、盛名頓に江湖に籍甚せられ、より多くの大を致さしめ、中央財界に重きを置かしむ。これ熊襲民族の直系と稱せられ、勁邁剛腹たる千葉的氣質を發揮して遺すなしと評すべきか。

▼飜つて渠の私行を見んか懇切慇懃を極め、頗る部下に厚きあり、其の天禀の積極主義を持するも、事に當るや、着實穩健の營業振を爲して倦まず、而も風雲に叱咤するの概を有ちて辛辣なる商才を各方面に活用して遺すなし。卽ち能く投機界の機微を洞察して、屢次頗る付きの大思惑を爲し、市場、「中山筋」又は農工筋として喧傳せしむるもの、以て渠の一面の消息を傳ふるに足らん。吾人窃に故星亨を憶ひ、渠の將來、實力勢望の偉大なるを認むるに躊躇せざるなり。

工業界の覇王　東京電氣株式會社

（藤岡市助、綾井忠彦）

▼人一たび多摩の河畔を過ぎんとき、川崎驛より巍然たる白堊の三層閣の天を摩するものあるを見るべし。是れ東京電氣株式會社の領域にして敷地實に三萬坪、大小數棟の建築を始じめ、專用道路、專用水道、專用瓦斯タンク、專用埋立鐵道、專用荷揚道路等の諸機關悉く備はり、企業界の一大勢力として、關左の平野に睥睨す。今にして之を觀れば其の今日を贏ち得たる成功の徑路易々たるべきを想はしむるも、二十有餘年の慘澹たる歷史は今日此の光輝ある成功を齎らしたるものにして、其の惡戰苦鬪、優に一世の龜鑑とするに足るべし。

▼卽ち明治二十三年白熱舍と稱して電球の製作に從ひ、明治二十九年組織を改めて東京白熱電燈球製造株式會社と爲し、越えて明治三十二年二月三たび組織を改めて現稱を冠し來りしものにして、其の勇戰奮鬪は到底凡庸の輩の企て及ぶ所にあらず、就中明治三十八年米國紐育州スケネクタリー市のゼネラル、エレクトリック會社と資本提携の諦盟を爲し、玆に益進的發展の策を樹立し、爾後明治四十一年に至る迄五分乃至八分の配當を爲し、明治四十二年に至つて一割、次で一割二分に上り、一昨年以來に至つては一躍二割を配當し得て、多年の忍耐、苦節に對して、酬ゆる所ありたるは特記するに値ひすべし。

▼如今、我が國に於ける電球の需要總數は年額一千四五百萬個、價額は四百五十萬圓を算し、其の供給の統計を見るに獨逸シーメンス、シユッケルト會社、アルゲマイネ會社、アウエル會社、及び墺匈利國ウエスチン、ハウス會社等の外國輸入品は約其の一割を占め、東京電氣株式會社、大阪電球株式會社、日本電球會社、弘榮電球會社、甲子電球會社、帝國電球株式會社、東京電球製作所、江東電球合資會社、横濱電氣工業會社等の製造に係る內國品は其の九割に居り、特に東京電氣株式會社の製品が其の七割五分以上を領有するを見るに至つて、其の飛躍的發展の決して尋常一樣にあらざるを知るべし。

▼宜なる哉、東京電氣株式會社は今や電球界の覇者たるの地位を占め以て宇內に睥睨す、其の勢力は啻に日本のみあらず、東洋のみあらず、世界に於て第六位以上の地歩にあり、此の具體的證左とも見るべきは其の大正元年下半期以來の配當額にして、事業界稀有の配當二割を斷行して、尙十分の積立金及び繰越金に資したる比類絕無の好成績は、倏忽にして五十圓拂込の株をして一躍二百三十圓の高價を現出せしめ、一昨秋九月の交、資本金百六十萬圓に更に二百萬圓を增加して三百六十萬圓となし、今や社員二百餘名、職工男女二千餘名を計上し、一日の製作高、タングステム球、四萬個、カーボン球一萬八千個を產し、隆々として社運揚がり、赫々たし

て社會に信用を博す、豈旺んならずとせんや。

▼斯くの如く企業界の成功は今や獨り東京電氣株式會社を寵し、其の地歩、其の名譽、其の信用、將に鼎の如く重からんとす。其の同社の今日あるを得たるは、社長藤岡市助氏を始め重役長富直三、田村英二、川崎芳之助、立川勇次郎の諸氏茲に經理部長綾井忠彦、工業部長新莊吉生氏等の戮協一致、以て怒力奮闘に職とし因らずんばあらず。

▼社長工學博士藤岡市助氏は我が電氣事業界のオーソリチーにして、明治十四年帝大卒業以來斯界に貢獻して已まず、帝大教授を始め東京電燈、東京市街鐵道、兩會社技師長として令名あり。尚桂川電力を始め、小田原、京濱阪神の各電氣鐵道會社の顧問たりき、博士を社長に推したる東京電氣會社の今日ある、所以なしとせず、尚藤岡博士に配するに清廉恪勤の綾井經理部長を以てするは錦上更に花を飾るの觀なくんばあらず、綾井氏は曩者村井吉兵衛氏の信任を博し、村井銀行の支配人として有終の美を濟し、就中計數的手腕の卓越なるあり。且つ快麗流暢の社交振り、又は英語會話に堪能なる、邦人中罕れとする所、昨秋歐米を視察し、歸來社業の發展に力む。該社が外國會社と資本提携の諦盟ある今日、綾井氏の如き眞に同社の柱石たるを失はず、今や同社が電氣事業界に居然として君臨し、些かも他の窺覦を許さず、燦爛として光輝ある歴史を財界に輝かして、正に天下獨歩の壇上たり。吾人旃れ焉を惟ふて最高幹部諸氏の努力奮闘に對して敬虔の念を拂ふに吝かならざらんと欲す。

堅實主義の　共正銀行

（南條新六郎、辻川敏三）

▼嘗て警視廳當局者に聞く『据置貯金又は公債月賦販賣を目的とする銀行會社の經營は、獨り經營者の資力多きを以て足れりとせず、更に手腕才幹ありて外交員の操

縱、事務の統一に其の妙を得ずんば到底克く其の目的を貫徹すること能はず、素より斯種の事業は、一般世人に甚大なる影響を及ぼすものあれば、之れが監視取締に於ても亦至難也』と。惟ふに事業の經營は、經營者自身の信用と經營的才幹と相俟つて其の優秀なることを要すべきも、就中勃興せる斯種の會社銀行が既に創痍時代を經て玆に過渡時代に入りたる今日にありては特に之が經營に苦しまざるを得ざるなり、是に於てか僅かに資本金十萬圓(拂込二萬五千圓)を以てして社運の隆盛を江湖に謳はれ、同種の會社中嶄然頭角を拔ける元の東京國債株式會社の如きはまた異數の成功を收めたるものと謂つべし。然らば該社をして能く今日あらしめたるは果して何人ぞ、是れ現に共正銀行專務取締役にして久して東京國債の專務として其の實權を掌握せし辻川敏三氏其の人なり。

▼辻川敏三の名、未だ中央財界に著聞せざるも、其の新進精鋭の氣と勇邁敢往の概とは既に東京國債に發揮し、一部人士をして歡賞せしめたり。渠は關西商業學校、應慶義塾商業部に學びたるのみにして、學歷たる何等特記するに値ひせざるも、夙に玉川電氣鐵道株式會社に聘せられ、重役代理として經營的手腕の凡ならざるを發揮し、後ちアセチリン瓦斯の經營を爲し、或は茨城縣下に牧畜場を新設し、更に轉じて熊本移民會社に入りて手腕を揮ひたることあり、時に失敗を重ね、以て人情の機微を穿ち社會狀態の情致に精通し、最も社交に長じ、對者をチヤームするの妙味を有す。是れ渠が夙くも成功圈内の人物と謳はれ、過般創立せられたる日東國債の監査役に推され、又大東鑛業、西武鐵道等の取締役に就任し、若々中央財界に向上の地歩を進めつゝあるの所以たらずんばあらず。

▼共正銀行が開業以來僅かに一年餘、財界不振の惡影響を蒙むり都下同業者の破綻頻々たる渦中に在りて、尙ほ且つ自若として着々發展の歩武を進めつゝあるは、畢竟渠が銀行經營の初一歩を謬たず、最も堅實なる方針に準據せしに起因せずんばあらず、卽ち重役等の拂込金等も總て現金拂込として一般新設銀行會社の通弊たる空

手形拂込を峻拒せるの一事を以て其の一班を窺知し得べし。

▼更に共正銀行に於て誇りとすべきは、其の頭取として信用厚き、南條新六郎氏を戴けること是れなり。南條氏は群馬縣館林藩士にして明治維新の際、王事に力を致し後ち鄕地にありて產業の振興に努力し、尙ほ四十國立銀行幷に群馬縣農工銀行に頭取として令名あり。其の他日本製粉株式會社長として同社の發展を劃したるを始めとし、日本織物會社、桐生縮緬會社、東武鐵道會社等の設立に斡旋盡力し、今や群馬縣下唯一の先輩として實業界に推稱せらる。而かも其の信用を重んじたるの一例は、前年群馬縣農銀頭取たりし際、配下の支配人某の行金費消に任責して、自ら連帶責任を負ひ、年賦賠償の爲めに私財を拋うちたるが如き、今尙ほ縣人一般の歎賞し且つ又た同情を表して歇まざる所なり。聞くならく渠の嫡男が現に三井物產倫敦支店長の職に就いて將來の大成を囑目せられつゝあるが如き、また積善の家の餘慶と謂ふべきか。

▼要之、內に經營的才幹ある辻川氏あり、之に配するに信用江湖に普ねき南條氏を以てして頭取に推す、更に恪勤精勵の評ある原田雄門氏支配人として行務を處理す、共正銀行が開業以來幾何もなくして同業銀行間に將來を囑望せられつゝあるもの、蓋し故なきにあらざる也。辻川氏は山口縣玖珂郡麻里布の人、夙に潑溂俊邁の鬼才を以て稱せらる、年齡僅かに三十有四、冀ふらくは近く中央財界に活躍するを期せよ。

斯界のレコード破り　大正生命保險株式會社

（岡　烈、　金光庸夫）

▼保險事業の有利なることは方今既に江湖に識認せられ、新設會社の活躍今や大に見るべきあり、是れ保險事業が新文明に伴つて、個人の危害を保障すると共に一面に於ては經濟界の調節機關となりて其の任務を全うし、且つ又た鉅商富豪等の世襲

的事業として好適のものなればなり、富豪と保險事業の連絡、蓋し經濟的推移の一進歩にあらざるなきを得んや。

▼試みに富豪が其中心となりて、保險會社を經營せるものを物色せんには、寔に僂指するの煩に堪えざらんとす。夫の安田一家の共濟生命保險に於ける、或は古河一家の博愛生命、大倉一家の日之出生命保險に於けるが如き、その最も顯著なるものにして、其の他越後の名門西脇家の太陽生命保險、大阪の鉅商加島家の大同生命保險、あかぢ一家の旭日生命保險等の如き、孰れも是れ新鋭の會社として我が保險界に雄飛しつゝあるも、就中神戸市の鈴木家を中心として設立せられたる大正生命保險株式會社の如きは、設立以來日向淺きに拘はらず、信用今や頓に昂がり、契約高の急進なる殆んど驚目に値ひし、同業會社中夙に頭角を現はし、其の潑溂たる營業振の如きは正に一新機軸を示して、先進會社をして後へに瞠着たらしめつゝあり。

▼大正生命保險の特色たる、其の積立金全部を以て國債を購入し、之を日本銀行に保管を託し、一面我が國債政策に貢獻し、一面には契約者をして意を安んぜしむるにあり、同社が創業以來未だ一年半を出でずして、既に契約高一千七百萬圓に達し我が保險界に於ける契約率のレコードを破りしこと、以て其の一班を證すべきにあらずや、是れ其の中心人物の籌謀計策、よく肯綮に中れるに非ずんば焉くんぞ斯くの如きを得んや、その中心人物とは誰ぞ、卽ち專務取締役岡烈氏及び取締役兼支配人金光庸夫氏その人にあらずや。

▼惟ふに自由競爭は適者生存の理法に從ひて瞬間も歇まざる所、而して保險事業の如き、現に過渡期に屬し、同種會社相互の競爭圏内に起ち、疾風迅雷の武者振りを以て、其の經營に滿幅の努力を傾注せんか、自然淘汰を受くるものあるは勿論なるも延ゐて營業費濫出の結果、相率ゐて倒るるの惡現象を招致するやも未だ知るべからず、而かも獨り大正生命保險が截然として他會社を壓し、その社運を隆盛ならしめたるは、畢竟經營者の靈腕よく剛柔相應じ、外交員の操縱、營業方針の確立等、其

の機宜を得て派手に陷らず、將たまた地味に泥まず、克く此の兩者をして卷舒その機を謬たざりしに因らずんばあらず。

▼同社の中心人物たる專務取締役岡氏は山口縣の人、夙に吉田松陰先生の松下村塾に入りて漢學を修め、磊落義心の薫育を受け、經世の抱負を擁して帝都に出でて明治法律學校を卒へ、先づ大藏省に職を奉じ、專ら稅務行政に關はり、また稅務官として金澤、廣島、小倉の各稅務署に歷任し、事務的才能を以て同僚に推重せられ、日露戰役後轉じて財界の人となり、神戸鈴木商店の支配人となり、爾來實業界の新進人物として謳はれ、また千代田瓦斯の專務、東京瓦斯の取締役を始め東洋製糖、京王電氣、臺灣興業、帝國麥酒等の重役として嘖々たる令名を馳せたるの俊才、而かも性至孝にして磊落、人に接して謙讓を極むるも、橫溢しつゝある義氣江湖に感賞せらるること尠からず、大正生命保險の今日ある、一に渠の獻策籌謀に基づかざるはなく、盛名頓に籍甚たる、また所以なきにあらざるなり。

▼岡專務に次で其の中心人物たる取締役兼支配人金光庸夫氏は、その名未だ江湖に著聞せずと雖も、周匝なる思慮、橫溢せる才幹は夙に儕輩幷に先輩の景仰せる所、嘗て職を稅務署及び稅關に奉じて英材俊髦の名を博し、明治四十一年官を罷めて神戸市の豪商鈴木商店に入り、天禀の商才を發揮し、尋で太陽生命保險會社に入りて支配人となり、專心社運の挽回に努め、以て斯界に敏腕精勵の聲名を謳はれにき。

▼後ち大正生命保險會社の創立に從ひ、專務岡氏と共に經營の重任を双肩に擔ひ、鞠躬如として社務を總覽す、而も素と同社は神戸市の豪商鈴木一家が大株主となりて設立せられたるものなるを以て、其の基礎や堅實、其の信用や深厚なるも、保險事業の經營は由來至難にして、徒らに金力本位を以て終始すべきにあらず、被保險者の勸誘、外交員の監督取締、代理店の監視取締の如きは、圓熟渾融の八面玲瓏的の技倆を有するものにあらずんば、到底經營の任を完うすべきにあらず、新會社中、夫の富豪的經營に因りて多額の營業費に苦しむもの、或は辣腕的方針の爲めに會社

經營難に陷れるもの多き、蓋し經營者に適材を得ざる罪、職とし之に由らざるは莫し、大正生命保險の前途、また多望なるかな。

關東の名門　阿由葉鎗三郎と關係事業

▼零碎の資金を集めて天下の金融に資し、併せて政府の公債政策に貢獻せんとするは、甚だ可し。而かも世間此の美名の下に隱くれて堂々たる會社が、其の經營の爲めに譎詐貪婪を逞しうして靡かざるものあり。夫の公債會社の經營者に地位、聲望與に全からざる無名の實業家が累々として恰も梨雨一過、春筍倏忽に簇生するが如き現象を我國の財界に見るに至らんとは、吾人の豫期せざりし所なり。獨り玆に關東屈指の名門、阿由葉鎗三郎氏が、儼として時流を拔んづるのみならず、進んで日本國債株式會社長として自ら全責任を負ひ、堅實鞏固なる理想的經營を體現しつゝあるは、現下の一偉觀たらずんばあらず。

▼阿由葉社長の經營振りたる、自ら社に出でゝ實務に勗む、例令へば他社の如く、專務常務等の取締役を設けず、日々支配人和田廉三郎氏を督して、社務一切を主宰し、眞摯誠實、稀れに看る所なり。渠が名門の出たる人としては、確に凡鱗常介と其の選を異にす。是れ同社が着々として、業務の發展を見るに至れる所以、其の營業振りの地味なるにもせよ、常に漸進しつゝ社運の基礎次第に鞏固を加ふるもの、畢竟渠れの人格に俟つ所多きに依らずんばあらず。

▼借問す。渠れの人物は如何。渠は鎗一筋の家に生れたる生粹の武士なり。その天稟の性、卓越優邁なる素より然らしむる所敢て怪しむを須ひず。渠れは幕末の劍客、千葉周作門下に四天王在りと聞えたる中の一人、下山信之翁の嫡男に生る。其の後出でて叔父たる阿由葉家を嗣げるものにして、此點に於てもそんぢよ其處らの成金とは、自から其の儔を異にせり。乞ふ吾人をして少しく渠の身上に就いて記述せしめよ。

▼先考下山信之氏は、旗下七千石を領したる幕臣富田信濃守帶刀の一家臣にして、最も武術に長じ、免許皆傳の師範たり　下山氏の先代は、石川勝右衞門氏にして、三男あり。曰く長兄勝内氏（八十才）曰はく次兄下山氏（七十五才）曰はく三男故阿由葉吟次郎氏是れなり。勝内氏と下山氏は今ま猶ほ鑼鑠として、壯者を凌ぐ概あるも、不幸吟次郎氏は明治四十年、白玉樓中の人と化しぬ。而して阿由葉鎗三郎氏は垂髫の時、叔父阿由葉吟次郎氏の養嗣子となり、竟に阿由葉家を嗣ぎたり。渠れが居常武士道を提唱し、人格を云爲するは、是れその天賦の然からしむる所ならずんばあらず。

▼阿由葉吟次郎氏は、明治實業界に於ける成功者として、推賞に値ひすべきものあり、曾て生絲業を營みて收利あるや、直ちに土地、山林を購ひて殖產致富の策を講じ、獨力以つて富數十萬を累積し、初期以來の多額納稅者として、終始村治、郡治、縣治に最善の努力を致し、尙ほ實業方面の振興を圖り、四十銀行、足利銀行、足利模範撚絲株式會社に各々重役として、業務の發達改善に盡せること尠からず。晩年貴族院議員として中央政界にも公正穩健の見を持して、奔馳貢獻して倦まず。最も社交に長じ、常に交際社會に處して、快麗の手腕を揮ひ、一面幾多公共事業に盡瘁し、令名闔縣に籍甚せり。蓋し氏の如きは、名聞に馳せざる眞の成功者と謂つべし。

▼一代の偉材、故阿由葉吟次郎氏の薫育を受けたる鎗三郎氏が、異彩の光芒を放射するは、別に贅言を要せず。洵に當代實業家の模範たるは世人の稱譽して已まざる所也。渠れは明治十三年十六歳の時、笈を負ひて帝都に出で、專修大學に入り、經濟學を專攻して、業畢へ鄉に歸り家業に力む。渠れは鄉地に消防頭たること十年、乃父吟次郎氏の逝くや、直ちに四十銀行、足利銀行、足利倉庫株式會社長、足利燃絲株式會社等の重役となり、又た公職としては、村長、村農會長、縣會議員、足利郡農會代表委員、下野新聞監査役、縣農會名譽會員、縣郡地主會理事等、殆ど傳

指するの遑なからんとす。且つ公共と慈善に厚きを以て鳴れり。先年郷地の小學校基本金並に早稻田大學に賛助金として各々一千圓を寄附したるを始めとし、各種の慈善事業に義捐したること擧げて數ふべからず。

▼而かも資性嚴直にして、苟くも非違あることを許さず。先年足利銀行監査役在任中、嚴正なる監査を試み、總會席上に之れを縷々數萬言し遂に大藏省に臨時檢査を申請したることあり。後ち足利銀行が增資を圖りたりしとき、主務省の認可荏苒日を空うして下らざりしが、こは渠れの檢査申請に基けるもの、漸くにして同銀行が增資して二百萬圓となし、行運の發展を致したる、皆な渠れの精緻なる監査に依り大藏當局に對し檢査請求を取消したるに出づと、渠が一般重役の如く徒らに旨判を捺すのみを以て能事足れりと爲さざるの一斑を窺知すべし。今や日本國債會社長として今日の如く異彩を放てるもの、豈に一朝一夕にして贏ち得たる安値の光榮ならんや。

▼其の日本國債株式會社の經營に當るや、卓然として斯界の弊風を匡正すべく、一新機軸を案出し、自ら社務を統宰董督して、冗員を使用せず、社業の發展に努力しつつあるは、斯種會社中、罕に見る所也。同社は大正元年十月の設立に係り、取締役社長たる渠れの外取締役柳田市郎右衞門氏、佐渡秀光氏、監査役初谷藤兵衞氏等あり。柳田氏は足利銀行の取締役にして、併せて足利撚絲株式會社の取締役に居り、足利町に於ける屈指の有力家なり。而して佐渡氏は前後三回獨逸に留學して、新進の文明教育を受け、且つ皮革事業を研究し、曩日朝鮮皮革株式會社の重役となり、技師長を併せ兼ね、頗る社務に盡瘁するの外、更に朝鮮電氣瓦斯株式會社の重役たり。若し夫れ初谷監査役に至つては、眞面目を以つて鳴る實業家にして、凡て以上の諸重役は自から同業會社重役と其の選を異にす。從つて其の社則、營業方針等の如き、劃然として大に見るべきものあり。卽ち質實穩健主義を以て營業上の一大標榜となし專ら經費の節減を謀りて、內容の充實を期せり。同社が創立以來、未

だ日幾何もあらずして、良好の成績を示し、現に二百萬圓以上の契約高に達し、各地に於いては、則ち有力なる應援者を得、以つて地方に募集地盤を鞏固に且つ又た擴大しつゝあり。

▼如上、堅實なる營業方針を以つて益進すると共に、阿由葉社長以下各重役等の奕奕たる信用と手腕とは相俟ちて、機宜を得んや、社運駸々として進み、現に代理店三百有餘を全國樞要の各地に設置し、大坂、名古屋、四國池田町に夫々支部を置き、又大津、京都、神戸、岡山、廣島、萩、鹿兒島の各市に出張所を增設し、頓に同業會社を凌駕するの盛況を見るに至れり。是れ社員協力一致の功、素より沒すべからずと雖も、亦た阿由葉社長の聲望と人格の賚ならずんばあらず。

▼渠れ、曩に鄕地の輿望を擔ふて代議士に當選したり。而かも其の當選振りの鮮かなる、全國に比儔を絕てり。卽ち選擧期日僅々一週前に立候補を宣したるのみなるに、自らは東都に優游自適しながら、何等齷齪たる態なくして中位以上を以て中原に鹿を射止め、爲めに我が選擧界に嘖々の好評を受けたり。これ叩頭百遍主義なる一般選擧界の風潮に照らして、豈に雲壤も啻ならんや。如今第三十五議會解散の後を承け、近く中原に白兵戰は開かれんとす。而して渠れは今や正に栃木縣下の逐鹿界に起ちて華々しき名乘りを擧げたり。名實俱に具はり、天下の選良たる渠の當選や期して待つべきなり。

▼若し夫れ議會に於ける渠れの功績に就いては識者既に知悉す。其の公正の態度と一大抱負とを持して、第廿九三十の兩議會には豫算常任委員、第三十一、二、三、四の各議會には、請願常任委員と爲れる等、其の大なる輿望を看る可し。而も日本勸業銀行條例中、一部改正の建議を爲し、其の容られて建議の趣旨を全うしたるは江湖の以つて多とせる所、次で第三十五議會には、中正會幹事として中央政界に斡旋寄與せること尠しとせず、確かに渠れは選良中の一部將たるを失はざるなり。

▼資性快活にして、夙に趣味の豐富を以て鳴る。一見蒲柳の質の如く溫容寬潤の

態あるも、流石に乃父の血を承けたれば、劍道に於いては目錄以上の技を有し、玉突、盆栽、圍碁の何れも皆な堪能を極め、所謂斯界の通人たり。渠れ亦糖菓を嗜むの甘黨たるも、時在つて宴席に座し、一莚にして數十名、羽觴飛び、玉爵織るも、苟くも獻酬を絶たず。長鯨の百川を吸ふが如き更夜の宴飲、敢て玉山の崩るゝを知らず、醉へば手品等の曲藝を演じてその酒興を添ふるなど、中正會の僚友をして喝采歎賞措かざらしむ。酒間の才人たる渠れが八面玲瓏の才華煥發せるを見るべし。

▼飜て渠の家庭を見んか、先づ何人と雖も、羨望措く能はざるものあり。嫡男正一郎氏は明治四十五年早稻田大學政治經濟科を卒業して今は家事を處理し、次男準次郎氏は優等の成績を以て第一高等學校を卒業し、現に東京帝國大學法科大學政治科に在り、頗る俊才の譽れ多し。若し夫れ令夫人孝子に至りては、眞に稀世の女丈夫にして、婢僕數十名を督し、家事一切を宰し、帝都在住の夫君をして內顧の憂あらしめざるが故に、渠れは一歲中數回の歸鄕に其の帳簿を閲するあるのみと。長女榮子は、旣に女子大學附屬高等女學校卒業後、更に進んで同大學の家政科に在り、今や才媛の譽れ高しと。渠れの家庭の圓滿なるは鄕黨の間に推稱せらるゝところ、其の邸宅の宏壯を極め一見城廓の觀あるは、以つて其の富を想ふべし。阿由葉家の將來や、多幸多望なるかな。

財界の俠骨

小野金六

▼著者曩に『財界一百人』を剞劂に附し、携えて當代の惡口屋早川顏鐵を敲き、忌憚なき批判を求む。渠れ欣諾一番、先づ卷を開くや否や、滔々數千言の長廣舌を揮ひ、爬羅剔抉、頗る縱橫の品隲を試む。其の評に曰はく、某は一片の成金のみ。某は僅に僥倖を贏ち得たるのみ。復た曰はく、某は先輩富豪の驥尾に附して、あは好く榮達したるのみと。詬罵し去り、嗤嘲し來つて、書中の人物、渠れに遭つて殆んど完膚なかりき。唯だ獨り小野金六氏を見るや、激賞措かず。氏こそ眞の實業家なれ、更

らに義俠的實業家の典型なれと、初めて卓を敲いて滿幅の感慨に堪えざるもの丶如かりし。頑鐵の怪氣燄的評隲は、素より悉く首肯すべきにあらずと雖も、現代の名物男たる渠れが、敢て一個の小野氏に逢着して極言之れを讃美せるに至つては、這個の消息、大いに味ふべきにあらずや。

▼英雄を知るは獨り英雄なり。三十の比較的壯少にして、早くも勅任官に陞りたる雋傑早川頑鐵の如きは、只だ單なる惡口屋とのみ謂ふべからず。渠れ豈に好んで徒らに瞶々者流の顰に倣ひ、猥りに詬罵するを以つて快哉を覺ゆるものならんや。夫の稜々たる一片の俠骨、銷磨せんとしてすべからず、一たび身を挺すれば、水火の難と雖も敢て意に介せず、將に破綻せんとせし幾多の銀行會社を整理し、其の間何等の陰事を止めざりし小野の廉潔なる性格が端なくも一代の奇傑早川の心眼に映じたるに依らずんばあらず。

▼天下の雨敬、嘗て左右に語るらく、『俺の相談相手は、獨り小野金と安田のみ』と。

小野が明治財界の偉傑、安田善次郎、故雨宮敬二郎等と相併稱せらるるもの、素より當然の事のみ。頑鐵氏の評語、誰れか過ぎたりとせん。

▼渠は山梨縣北巨摩郡韮崎町の產、性倜儻にして不羈、豪語すらく、男子生れて苍闔の間に沒頭すべけんやと。弱冠にして鄕を出で、京濱間に放浪す。偶々海外互市場として、横濱の開港せらるゝに遭ふや、夙くも生絲、甲斐絹の取引に從ひて、奇利を博しぬ。これ渠が實業界に身を投じた「いろは」にして、爾來春風秋雨、玆に數十年。大小幾多の銀行會社の設立に參與し、又內外各種の事業に、潑溂的手腕を揮ひ、一躍して事業界の名物男と爲る。而かも富鉅萬を積まざるは、却つて渠れの本領を看るべく、是れ畢竟渠れが、公共の福利を唯一の目的とし、片々たる虛業者輩の如く、徒らに自己一身の福祉安逸を貪らざるが爲めなり。世上渠を目して態度傲慢なりと倣すものあれど、皮相の一觀察のみ。渠の事業に熱心なるや、毫も情實に纏綿せられず。故を以つて時に江湖の誤解を受くと雖も、紛々たる俗評は、毫も渠

の人格に累する所なし。

▼渠れが、常に混沌として前途の光明を認むるに難き銀行會社の整理に狂奔するが如きは、渠れが天禀の任俠に依れり。以つて其の私利に遑々如たらざることを立證し得べし。世人渠を稱して「何んでも屋」なりと做し、或は「飛んで火に入る夏の蟲」など、頗るオセツカイの流説を放つものあるも、口善惡なき京童の事どもなり。渠れ一だび然諾すれば、他の窮乏困厄は、之れを默視するに忍びず、俠骨稜々として財界を壓すべし。而かも煉炭會社、東京機械製造會社、富士製紙會社等の如き、何れも渠れの手腕を至誠とに依りて、其の厄運を挽回したるもの、小野が斯界に重望を負ふ。蓋し故なきにあらず。

▼往年、財界の大勢を逸早くも看取して東京割引銀行を創立したる渠れは、自ら頭取となり。其株主は其の一門を以てし、最も堅實なる營業方針を樹て、手形の割引交換に從ひ、金融市場に陸離たる一光彩を放ちたるは、特に我が金融史上に大書記すべき價値あり。若し夫れ輸出食品株式會社を創立し、北海道、樺太方面に工場を置きて、海産食料品を製し、露國を始め其他の海外に輸出せるが、就中過般特殊の用命を帶びて來朝したる、露國ゲルモニユース將軍より、巨額の取引を約したる等、總て外國正貨の吸收に努めつゝあるが如き、以つて渠の抱負と識見の大なるを知るべし。

▼甲州系として、截然一旗幟を飜へし、故雨敬氏に次で、事業界に活躍しつゝあるは、渠れが現下の武者振りなり。曾て富士製紙、桂川電力の兩會社に成功して有終の美を濟し、近く甲駿二國に亘れる富士身延鐵道を創立し、今や根津、佐竹等と雁行して、甲州派の一頭目たり。渠れ居常好んで事業を企劃すれど、未だ拜金宗たらざるは財界罕に見る所、俠骨欽すべからずや。

復活したる

萬世銀行

▼險惡なる財界の怒濤に、棹す銀行經營の至難なるは、一に信用を以て營業の基礎と爲すが爲め也。坊間一たび蜚語飛ばんか、忽ちにして取付騒ぎとなり。遂に破綻の悲境に沈淪するは、往々に見る所なり。

▼近かくは北濱、岩谷、東海商業、旭貯金、東京共立の各銀行の如き比々として皆然り。茲に又た昨春突如として、神田區の公金を取扱へる萬世銀行も、破綻の悲運に迫り、我が預金者、取引者間に尠なからず、疑惧の念を抱かしめ、延いて我が財界の一角に、澎湃たる波瀾を捲き起したり。

▼云ふ迄もなく之等貯蓄銀行の破綻は、已むなき四周の事情に迫られ茲に至れるもの、其の多くは銀行經營の弊竇が既に病となりて膏肓に入れるが爲め、容易に治癒すべからず。唯だ獨り萬世銀行に至つては、若々整理の實擧がり、預金者大會、株主協議會、重役會等を開くこと茲に數十回。遂に復活の曙光を認めたれば、近く艶陽四月、櫻花爛漫の佳期を卜して整理の完了を告げんとす。如今銀行經營難の時に方り、同行の整理を見ることは、洵に空谷に跫音を聽くの感なくんばあらず。

▼抑も萬世銀行の整理は、如何にして成りたるか。曰く、整理委員の熱誠眞摯と現重役の誠實、復た曰はく、預金者側の同情則ち是れと。此の三者初めて能く合致したる結果、所謂外部に處して會社喰いの肉薄を防止したるが爲めならん。乞ふ吾人をして簡明直截的批判を下さしめよ。

▼聞說く、東都財界に會社喰ひの一團あり。渠等は貪婪飽くことなく、而かも虎視耽々として、銀行會社の罅隙に乘じ、熾んに爪牙を磨きつゝあり。時としては銀行の預金帳を買受け、或は預金者を煽動して、待ち構えたる整理の名の下に隱れ、請託奢縁の情實を巧みに利用して、以つて整理難に陷らしむ。此を以て銀行會社の破綻一たび、世上に傳はるや、此の會社喰の醜團は、倏忽蟻附し來り種々の奸手段を

弄して已まず。萬世銀行が昨秋以來、よく其の整理を進捗せしめたるは、實に之等の醜團に累せられざりし一因なり。

▼更に同行の整理委員を見るに、何れも財界に信用を繫ぐに足るもの多し。卽ち前代議士にして神田區内の一勢力たる稻茂登三郎、神田青物市場副組長村木喜助、神田區會議員大橋留吉、又た金銀商として有名なる德力主人鈴木喜兵衞、元株式仲買人齋藤種五郎、本郷區の豪商冠松兵衞氏を始め、印刷業者間に有名なる堀江文次郎元銀行重役塚原元兵衞、大東鑛業及び共正銀行に重役たる鋤柄三郎氏等あり。若し夫れ其の常任委員たる山本久顯、朝蔭玉次郎、金長善次郎氏の如きに至つては何も其の手腕信用の非凡を以て鳴れるもの、玆に贅するを須ひず。故を以つて之等委員が眞摯の情を披瀝したる整理案の如き、或は又た會社喰ひの一團肉薄するや、整理委員長たる山本久顯が土佐獨特の辯才を以て、言下直ちに之を擊退したるが如き、轉た人をして歎賞措く能はざらしむ。斯くの如くにして同行整理に於ける山本委員長以下各委員の功豈に沒すべけんや。

▼試みに其整理案に就て見んか、誰れか其の機宜を得たるを稱せざるものあらん。卽ち二千五百名以上の預金者になれる預金全額を、八朱利付優先株に振り替へしむること、現株主をして第二回拂込として株金の四分の三を拂はしむること、現重役の個人保證を以て某大銀行より金五十萬圓を借入るること等なり。惟ふに此等整理案の內容たる、其の一を以てするも、確に整理を全うし得るに足るは瞭々として明かなり。而かも兼ぬるに此の三者を以つてす。宜なるかな、萬世銀行の整理が着々進捗して當に開店の日近からんとする、洵に偶然ならざるなり。

▼古今東西を論せず、一般貯蓄銀行の破綻整理は、難事中の難事にして、能く有終の美を濟せしものは洵に晨星も啻ならず、適々萬世銀行が、獨り敢然として整理の實を擧ぐ、其の玆に到れるもの異竟其の整理方法の卓越せるが爲めのみ、更らに尙ほ破綻の原因に至つては、眞に斟酌同情に値ひすべきものなり。抑も同行破綻の

眞因や、世上傳ふる如く爾く現重役の怠慢非違の故にあらず。故西村前頭取が、曾て日露戰役當時、軍需品の請負に失敗し、一部取引者間に危懼の念を抱かしめ、爲めに當時約三百萬圓餘の預金を有せし同行が、立ろに百五十萬圓餘の取付けに遭ひ、玆に擔保貸付は固定して、遂に金融の自由を失へり。搗てて加へて、財界の不況に逢着したること、其の破綻の眞因たるを知れば、其の成行たる蓋し同情に堪えざるものあり。

▼大正三年十二月の決算を見るに、貸付金、三十二萬圓餘、割引手形九十八萬圓餘未拂株金三十三萬七千五百圓、整理勘定八十三萬圓餘あり。且つや前重役吉田幸作●●●●上田保三郎氏の如き太く自己の責任を自覺し、熱誠事に當るあり。金田傳兵衛氏の如きは七八十萬圓を有する有名なる資產家にして、卒先個人保證に任じたり。監査役松田清氏は元東京市長松田秀雄氏の嫡男、穗積峯三郎氏は神田區淡路町風月堂主人にして、夙に紳商として著聞せらるゝもの、何れも皆な至誠を以て整理に斡旋し且つ去歲重役三名相次で逝きたるを以て、有力なる取締役四名、監査役二名を增加し行務の發展を圖らんとす。內敏腕精勵を以て事を處しつゝある整理委員に充ち、外會社喰ひの肉薄を免る、同行の整理たる啻に關係者の利害のみならんや。

兜町の新進　鈴木常助

▼槿花一朝の榮華は、獨り成金者流のみにあらず、株式仲買人亦晨に夕を誇る能はず。夫の分秒の差、以て萬金の輸贏を決す。爭でか滄桑の感なきを得んや。然り最近五ヶ年間に於いて東京株式仲買人の廢業せしもの約三百有餘、昨年以來既に四十有餘人を算する如き、之が唯一の適例と做すべし。

▼電閃雷擊、瞬刻も靜止せざる活舞臺に卓出して仲買人たること、難事中の至難事にして其の苦痛たるや、蓋し門外漢の想像すべくもあらず。斯界に盛名を謳はるる、豈一朝一夕に期すべけんや。我が鈴木常助氏の如き、能く這箇の艱苦を蹴破し、仲買人として馳驅し得たるものと謂ふべし矣。

▼渠は先年直取引仲買人より轉して定期仲買人となりしもの、當時直仲買人にして既得權の下、能く定期仲買人たりし者の多くは、皆な從來の仲買人に比して、地位信用、營業振り等に於て籌を輸することゝ、一二に止まざりしも、渠は能く市場に嘖嘖たるの好評を受け、其の取引高の多額なる、また顧客を全國各方面に有するに於て、截然市場に一異彩を放たしむ、是れ其の營業方針の向上的にして而かも擧措進退、克く其の機宜を制したるが故にあらずや。

▼渠は尾州の人、鈴木仲右衞門氏の嫡男、明治九年一月を以て生る。夙に時勢の趨く所に鑑み、實業界に志を抱きて東都に出で、一時船具商大村五右衞門氏の店員となりしも、後に仲買人となり、以て株式市場に縱横の商略を發揮したり。居常眞摯にして、毫も衒誇の風なく、最も謙讓を極む、人ありて渠に其の意見を問はんか、渠れ口を緘して答へず。曰く『新米の仲買人、何の意見か是れあらん。予の鄕關を出づる動機と一身の經歷の如き、また固より然り』と何ぞ其の言の謙遜なる。而かも應酬快談の妙を盡し、以て一見舊知の感あり。是れ渠の非凡なるを想見せしむ。

▼渠の市場にあるや。素より乾坤一擲的の大思惑と爲さざるも、敢へて退嬰因循なるに非ず。卷舒、宜しきを得て、邁進的活動を爲すものにして、夫の忌むべき猪突豨勇の弊に陷らず。是れ渠の日進月歩的成功を收め、斯界に著聞せらるるに至れる所以たらずんばあらず。

▼爲人恬淡にして、又仁俠の風あり。先年東京府下の水害に遭ふや多額の金品を寄附して以て救恤の資に充つ。また渠の博愛仁慈の一片面たらずんばあらず。

▼今や、時局に際し市場遽かに混沌たらんとす。其の積年の信用を以て乾坤一擲的の壯擧を試みんことを渠に望むべからざるも、序次漸を追ひて進境を劃するに至らん。比年兜町裡の沈靜其の極に達し、各店何れも經營難を愬ふるの際、獨り超然として店舗を改築したるが如き、また渠の如何に餘裕綽々たるかを推知せしむるに足らんや。

外交通の鑽山家

田野豐

▼大正維新以來の政變に刺戟せられ、國民の立憲思想は頓に亢奮し來つて、東京市に於ける今次の總選擧に、立候補の名乘を揚ぐるもの、三十有餘名、政事家實業家は云ふも更なり、文士畵伯また經世の抱負を抱いて、立憲治下の法治國民として大いに憲政の實を擧げんとす。旺んなりと謂ふべし。而して其の候補振りや、十人殆んど十色の觀あるも、候補宣言中、候補者三十有餘の立會演說を希望したる田野豐の如きは、黃金萬能主義、叩頭一點張りの我が選擧界に於いては蓋し一珍たらずんばあらず。

▼渠が始めて我が東京市に代議士候補の名乘を揚げたるは、實に前回の總選擧に始まる。當時渠の試みたる運動方法たるや、最も公正摯實を極めたる結果と、且つ所謂『運動屋』の爲めにシテヤラレたるの氣味ありしが爲め、遂に不幸落選の憂目を見るに至れり。今次渠が踔厲一番して、捲土重來の擧に出でたる、當に恰も雪辱戰ともいふ可し。

▼方今、田野豐の名、未だ著聞されざるを以て、坊間渠の人格性情と、其の閱歷識見を知悉するものは稀れなりと雖も、曾て外相たりし故侯小村壽太郎をして『日露戰勝の世界的光榮を記念すると共に隱くれた一外交官田野豐氏あるを諼るべからず』と叫ばしめたるあり。渠の儔を凡鱗俗介と絕つもの故なくんばあらず。

▼渠れは明治二年鹿兒島に生れ、出でゝ慶應義塾に學び、業成るや、領事として任に就き、後ち露國公使、西德次郎男、外相陸奧宗光伯の信任する所になれり。故林董伯が露國公使となるの時、一等通譯官たりし渠は、林公使の幕僚として對露外交の機密に參じ、提案獻策したる所多し。就中露國の東洋政策を考覈愼査して、夙に日露戰役の竟に避くべからざるを看取するや、徐ろに對露政策を講じて、軍國將來の長計に資し、報國盡忠の至誠、凝りて一片の具陳書となり、遙かに我が臺閣に致